令和５年度

長期研修講座研究報告本編

協働的な学びが充実し、「分かる」「できる」を実感できるマット運動の授業

－「共生」「協力」の理解深化及び、観察シートと動画の活用を通して－

神奈川県立総合教育センター

体育指導センター　長期研究員

小田原市立城山中学校　宮里　鷹

目次

第１章　研究を進めるにあたって

1 研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

3 研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

4 研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

5 研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第２章　理論の研究

1 「共生」「協力」の理解深化について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2 個別最適な学びと協働的な学びについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3 「分かる」と「できる」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

4 技のポイントを共有する観察シートと動画の活用について・・・・・・・5

5 生徒の実態について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

6 形成的授業評価について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第３章　検証授業

1 検証授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

2 検証方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

3 単元指導計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

4 学習指導の工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

5 授業の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

6 検証授業の結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

第４章　研究のまとめ

1 研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

2 今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

3 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

〔引用・参考文献等〕

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題

協働的な学びが充実し、「分かる」「できる」を実感できるマット運動の授業
―「共生」「協力」の理解深化及び、観察シートと動画の活用を通して―

２　はじめに

令和３年に中央教育審議会より示された「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」（以下、「答申」という）では、「一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるよう，その資質・能力を育成することが求められている」（中央教育審議会　2021　p. 15）と記載されており、今日では、個別最適な学びとともに協働的な学びの実現が求められている。

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編』（以下、『解説』という）では、知識及び技能を指導する際に、「単に運動に必要な知識や技能を身に付けるだけではなく，運動の行い方などの科学的知識を基に運動の技能を身に付けたり，また，運動の技能を身に付けることで，その理解を一層深めたりするなど，知識と技能を関連させて学習することが大切である」（文部科学省　2018a　p. 31）と示されており、「分かる」ことと「できる」ことを結び付ける指導の充実が求められている。

また、「学びに向かう力、人間性等」の内容については、「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた体育学習に関わる態度に対応した，公正，協力，責任，参画，共生及び健康・安全の具体的な指導内容を示すこととした」（文部科学省　2018a　p. 14）と示されている。

本研究で取り扱うマット運動は、技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。

これまで筆者は、全ての生徒に技が「できる」楽しさを味わわせたいと考え授業を実践してきたが、それが十分にはできていなかった。また、「できる」ために必要な「分かる」ことについても十分に指導できていなかった。

その原因としては、自己に適した技に取り組むような指導に至らなかったこと、マット運動の技のポイントを理解させる指導が十分ではなかったこと、演技を見せる際に生徒が持つ羞恥心を払拭できなかったこと、コロナ禍の影響もあるが、仲間と協働的に取り組む授業が行えなかったことなどが考えられる。

そして、これらの原因を解決するには、自己に適した技を生徒に選択させ、マット運動の技のポイントを明確に示して理解を促すとともに、取組の成果と課題を共有できる教材（観察シートと動画)が必要であると考えた。さらに、一人一人の違い（仲間の体力や技能の程度等）に応じた課題や挑戦を認めようとする「共生」や仲間の学習を援助しようとする「協力」（文部科学省　2018a　p. 73）についての理解深化を促すことで、協働的な学びが充実し、「分かる」と「できる」を実感できるようになると考えた。

３　研究の目的

協働的な学びが充実し、「分かる」と「できる」を実感できるマット運動の授業を実践するため、次の手立ての有効性を明らかにする。

手立て：「共生」「協力」の理解深化及び観察シートと動画の活用

４　研究の仮説

中学校第１学年の「マット運動」（器械運動）において、「共生」「協力」の理解深化を図ること及び、観察シートと動画を活用することによって、協働的な学びが充実し、「分かる」「できる」を実感できるであろう。

５　研究の方法

（１）理論の研究

本研究を進めるにあたって、仮説の理論的裏付けを得るために、文献・資料を基に理論研究を行う。

（２）授業の実践と仮説の検証

ア　理論研究を踏まえた単元指導計画による授業を実践する。

イ　研究の仮説を検証する。

（３）研究のまとめ

理論研究と仮説検証の結果を基に、研究のまとめを行う。

第２章　理論の研究

１　「共生」「協力」の理解深化について

平成29年告示の『解説』では、第１学年及び第２学年において、「共生」について「体力や技能の程度，性別や障害の有無等にかかわらず，人には違いがあることに気付き，その違いを可能性として捉え，互いを認めようとすること」、「協力」ついて「自分のことだけではなく共に学ぶ仲間に対して必要な支援をしたりすること」と示されている（文部科学省　2018a p. 40）。

この二つの指導事項は、多様な他者と関わる上での土台となり、理解が深まることで、協働的な学びの充実に貢献すると考えた。

なお、「共生」「協力」の理解を目指す内容については『解説』（文部科学省　2018a p. 73）の通りとする（表１）。また、理解深化とは、本研究においては、「共生」「協力」の意味にとどまらず、意義まで理解できた状態と定義する。

表１　「共生」「協力」の理解を目指す内容

共生	「体力や技能の程度，性別や障害の有無等に応じて，自己の状況に合った実現可能な課題の設定や挑戦を認めようとすること(中略)参加者全員が楽しんだり達成感を味わったりするための工夫や調整が求められる(後略)」
協力	「練習の際に，仲間の試技に対して補助したり，(中略)助言したりしようとすることなどを示している。そのため，仲間の学習を援助することは，自己の能力を高めたり，仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動したりする(後略)」

筆者の今までのマット運動の授業では、「共生」「協力」の意味の理解に指導がとどまっており、意義を理解するまでには至らなかった。そのため、本研究においては、「共生」「協力」の意義の理解を含めて意図的・計画的に指導することで理解深化を図り、協働的な学びの充実につなげていきたい。

２　個別最適な学びと協働的な学びについて

「答申」では、個別最適な学びと協働的な学びについて、次のように示している。

（１）個別最適な学びについて

「『子供一人一人の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと』を『指導の個別化』といい、『子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取組む機会を提供することで，子供自身の学習が最適となること』を『学習の個性化』という。（中略）『指導の個別化』と『学習の個性化』を教師視点から整理した概念が『個に応じた指導』であり，この『個に応じた指導』を学習者視点から整理した概念が『個別最適な学び』である。」と示されている（中央教育審議会　2021　p. 17）。

筆者の今までのマット運動の授業では、共通課題として比較的難易度の高い技を設定していた。その結果、技ができる見通しを持てない生徒は活動意欲が低下したり、他者と自分を比較して劣等感を感じたりして、活動の量や質が低下してしまっていた。そこで本研究においては、生徒自身の技能到達度や課題、挑戦したい思い等を大切にし、生徒が自分で実施する技を決め、個に応じた課題が設定でき、主体的に課題解決に向かえるようにすることで、個別最適な学びを実現したいと考えた。

（２）協働的な学びについて

「『協働的な学び』においては，集団の中で個が埋没してしまうことがないよう，『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげ，子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで，異なる考え方が組み合わさり，よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。『協働的な学び』において，同じ空間で時間を共にすることで，お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある。人間同士のリアルな関係づくりは社会を形成していく上で不可欠であり，知・徳・体を一体的に育むためには，教師と子供の関わり合いや子供同士の関わり合い，自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験，地域社会での体験活動，専門家との交流など，様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が，ＡＩ技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まるものである。」と示されている（中央教育審議会　2021　p.18）。

また、松丸（2013）は「マット運動は友達と教え合ったり、助け合ったりすると技を身につけやすい運動で（中略）子ども同士の見合いや教え合いが比較的しやすく、アドバイスも明確にできるため、言語活動を活発に行いやすい単元であると言える。しかし、子ども同士が伝え合う事柄が明確になっていないと、漠然とした声かけしかできず、結果として技能の向上を味わえない授業になってしまう。」と述べている。

筆者の今までのマット運動の授業では、教師から生徒への一方的な指導に終始してしまうことが多かった。また、近年は、特にコロナ禍の影響もあるが、同じ空間で時間を共にしながら、生徒同士が関わるような場面が少なかった。さらに、生徒同士が助言をする場面においても、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うような意見交換や課題解決につながる具体的な助言をする場面も少なかった。

そこで、本研究においては、「同じ空間で時間を共にする」ことができるよう、ペアやグループによる学習活動を創出すること、「子ども同士が伝え合う事柄が明確になっていないと、漠然とした声かけしかできず、結果として技能向上を味わえない」、また「お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うこと」もできないこととならないよう、生徒同士が伝え合う事柄を明確にし、仲間との関わり合いを促すことで、協働的な学びが充実すると考えた。

（３）学習指導要領との関連について

「中学校学習指導要領（平成29年告示）」（以下「要領」という）の前文において、「一人一人の生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにする」（文部科学省　2018b　p.17）と示されている。また、「要領」の総則において、「個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努める」（文部科学省　2018b　p.19）とも示されていることから、「要領」においても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が重要であるとされている。

３　「分かる」と「できる」について

『解説』では、各領域の知識及び技能を指導する際に、「単に運動に必要な知識や技能を身に付けるだけではなく，運動の行い方などの科学的知識を基に運動の技能を身に付けたり，また，運動の技能を身に付けることで，その理解を一層深めたりするなど，知識と技能を関連させて学習することが大切である」（文部科学省　2018　p.31）と示されており、「分かる」ことと「できる」ことを結び付ける指導の充実が求められている。

岡出（1994）は、「わからないと『できる』ようにならない。しかし，わかったからといって，すぐに『できる』ようになるわけではない，わかったことが『できる』ようになるには，

それを実際に試すことが必要になる。」と指摘している。つまり、協働的な学びの中で重要とされている「リアルな体験を通じて学ぶこと」に通じると考える。

筆者の今までのマット運動の授業では、生徒に対して、画一的な指導や助言はしていたが、個々の生徒の能力差や技能差に応じて、個別に技のポイントを明確に示す指導が十分ではなかった。そのため、生徒は、見通しを持って技を習得することができていなかった。

今回の「要領」では、育成を目指す資質・能力の一つが「知識及び技能」と整理された。つまり、「『分かる』ことと『できる』ことを結び付ける指導の充実が求められている」ことからも、本研究においても、「分かる」ことと「できる」ことを関連付けて指導していきたいと考えた。

さらに、今までは、各技における理想とする形を「できる」と捉えながら指導をしており、生徒のできていない点を指摘することが多く、生徒の挑戦したい気持ちや、課題解決を目指す姿勢を支援する言葉かけが少なかったと考える。本研究においては、「できる」の認識を見直し、必ずしも理想とする形だけを「できる」と捉えるのではなく、「小さなできた」もお互いに認め合い、達成感が味わえるようにしていきたい。また、補助を用いてできた技も「できた」とするなどして、技ができる楽しさや喜びを味わうことにつなげていきたい。

４　技のポイントを共有する観察シートと動画の活用について

（１）各技のポイント（見る視点）について

宮﨑（2014）は、「技ができるようになるためには、その技のポイントがわかっていることが大切である」とし、仲間と教え合う上での各技のポイントを「見 point」として生徒に示し、これを活用して仲間に助言をするようにしたことで各技のポイントが「分かる」ようにし、「できる」ことにつなげられるようにしたと報告している。

筆者の今までのマット運動の授業では、個別に技のポイントを明確に示すことができていなかったため、生徒同士が技のポイントを共有するまでには至らなかった。本研究においては、各技のポイントを明確に示すことで、個別の課題に応じた技のポイントが分かり、技の獲得につなげられるようになり、「分かる」と「できる」が実感できると考えた。

（２）動画の活用について

『解説』では、「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を積極的に活用して，各分野の特質に応じた学習活動を行うよう工夫すること（中略）体育分野においては，学習に必要な情報の収集やデータの管理・分析，課題の発見や解決方法の選択などにおけるＩＣＴの活用が考えられる」と示されている（文部科学省　2017a　p. 238）。

また、文部科学省は、「教育の情報化に関する手引」において、「模範となる動きのポイント等を画像資料として示すことは，一連の動きを繰り返し見たり，動きの局面を静止して確かめたりすることができるため，学習への効果が期待できる」（文部科学省　2019　p. 98）と示している。

さらに、「自分の動きを写真や動画で撮影し再生することにより，技能面における自己の課題を見付けたり，課題解決の仕方を選んだりする際の資料となる。」（文部科学省　2019　p. 97）と示されている。

筆者の今までのマット運動の授業では、動画を撮影していたが、教師への提出のみにとどまっており、自分でポイントを見付けたり、生徒同士が互いに動きを分析したり、解決方法を話し合ったりする活動に動画を活用することができていなかった。

本研究においては、『解説』に、「課題の発見や解決方法の選択などにおけるＩＣＴの活用が考えられる」と示されているように、技の成果と課題を把握し、それを仲間と共有するために、自分の試技を撮影したもの（以下、「試技動画」という）を活用することとした。

また、「模範となる動きのポイント等を画像資料として示すこと」とあるように、技のポイントが「分かる」ことにつながる動画（以下、「見本動画」という）を活用することとし、「見本動画」は自分が必要なときにいつでも視聴できるようにした。

これらの動画を活用することで、「分かる」と「できる」の実感につながると考えた。

５　生徒の実態について

マット運動の学習指導計画を検討するにあたって、検証授業クラスの生徒を対象に、実態調査アンケートを実施した（当日は３名欠席のため、31名が回答）。図１に示す通り、「運動やスポーツをすることは好きですか」という問いに対して、「そう思う」24名（77.4%）、「どちらかというとそう思う」４名（12.9%）と回答した生徒は合わせて28名（90.3%）、「そう思わない」１名（3.2%）、「どちらかというとそう思わない」２名（6.5%）と回答した生徒は合わせて３名（9.7%）であったことから、多くの生徒が運動やスポーツを実施することに対して肯定的に捉えていることが分かった。

また、図２に示す通り、「あなたが楽しくないと感じる体育の単元（種目）を三つまで○をつけてください」という問いに対して、全体の38.7%にあたる12名の生徒が器械運動（マット運動）に○をつけており、マット運動が楽しくないと回答した生徒が全領域の中で一番多かった。

さらに、図３に示す通り、「マット運動の授業で楽しくないと感じる場面はどんな場面ですか」という問いに対して、22名の生徒が回答したが、「できない技を行うとき」が40.9%にあたる９名、「けがをしたとき」が31.8%にあたる７名、「みんなの前で行うとき」が13.6%にあたる３名等の回答があった。

これらのことから、検証授業クラスの生徒は、運動やスポーツをすることは好きだが、マット運動の授業は、楽しくないと感じている生徒が多く、また、楽しくない理由としては、できない技をずっとやっているときと回答している生徒が多いことなどから、マット運動の技ができるようになることの楽しさを十分に味わえていないことが分かった。

これらは、私自身のマット運動の指導の課題と共通していることが多く、マット運動の特性を十分に味わえていないと考えられる。

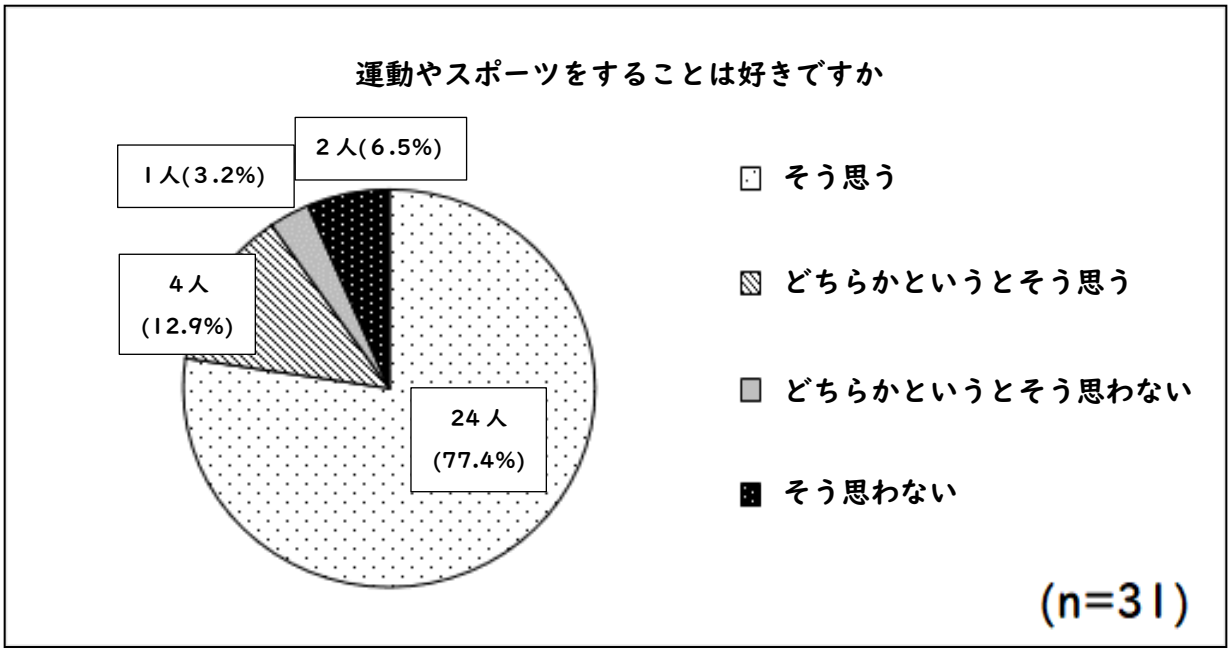


図１　運動やスポーツをすることは好きか

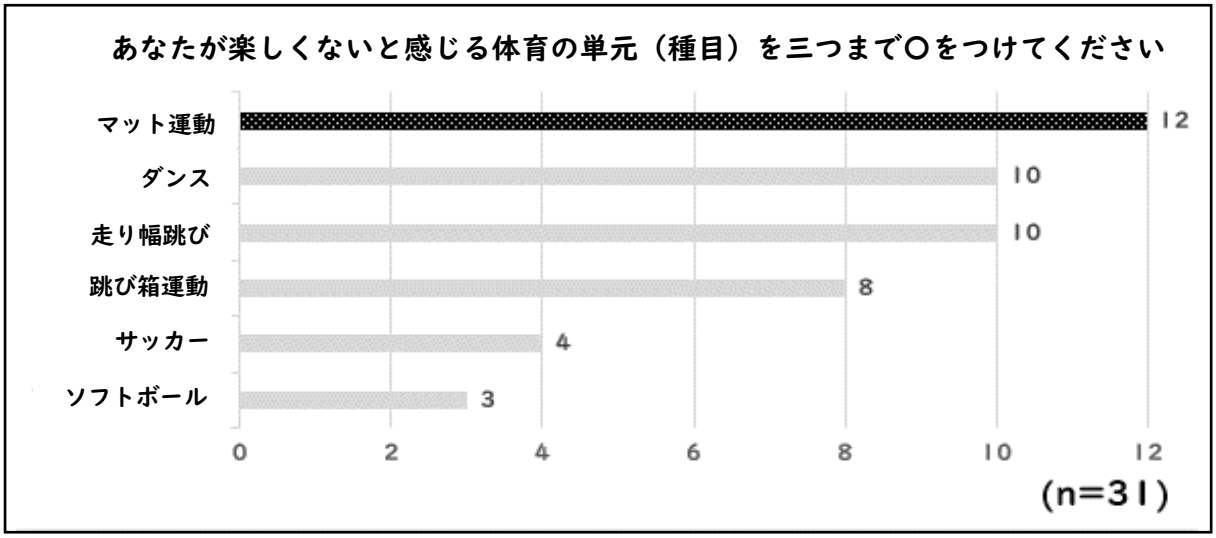


図２　楽しくないと感じる体育の単元（種目）

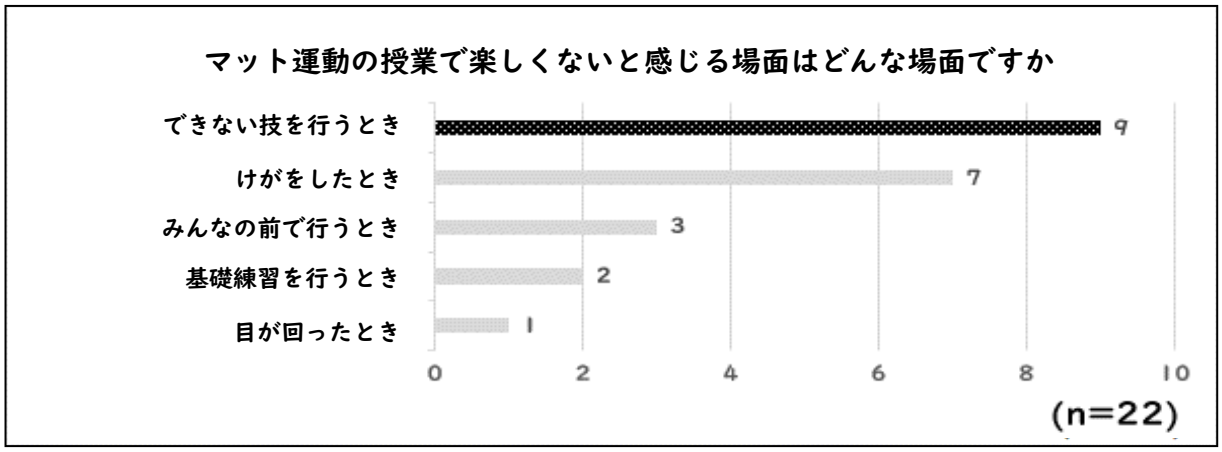


図３　マット運動で楽しくないと感じる場面

６　形成的授業評価について

高橋は、「授業実践を形成的に評価し、当初の計画を修正したり、個々の児童生徒の学びの実態を把握することは、授業成果を高めるうえできわめて重要である」と述べ、表２のような「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の四つの次元からなる形成的授業評価法を作成した。

そこで本研究でも、生徒が毎時間の授業をどのように捉えたかを把握し、次時の授業改善を図るために、形成的授業評価を実施することにした。生徒は、毎時間、学習カードで９項目の振り返りを行い、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の３段階で自己評価した。

検証にあたっては、「はい」に３点、「どちらでもない」に２点、「いいえ」に１点を与えて平均点を算出した。また、高橋が定めた表３の形成的授業評価の診断基準に照らして５段階評定で評価することとした。

表２　形成的授業評価の項目

次元		項目	はい	どちらでもない	いいえ
成果	1	深く心に残ることや、感動することがありましたか。			
	2	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。			
	3	「あっ、わかった！」とか「あっ、そうか」と思った事がありましたか。			
意欲 関心	4	精一杯、全力をつくして運動することができましたか。			
	5	楽しかったですか。			
学び方	6	自分から進んで学習することができましたか。			
	7	自分の目標に向かって、何回も練習できましたか。			
協力	8	友だちと協力して、なかよく学習できましたか。			
	9	友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。			

表３　形成的授業評価の診断基準

	5	4	3	2	1
成果	3.00～2.70	2.69～2.45	2.44～2.15	2.14～1.91	1.90～1.00
意欲・関心	3.00	2.99～2.81	2.80～2.59	2.58～2.41	2.40～1.00
学び方	3.00～2.81	2.80～2.57	2.56～2.29	2.28～2.05	2.04～1.00
協力	3.00～2.85	2.84～2.62	2.61～2.36	2.35～2.13	2.12～1.00
総合評価	3.00～2.77	2.76～2.58	2.57～2.34	2.33～2.15	2.14～1.00

第３章　検証授業

１　検証授業

（１）期間

令和５年９月20日（水）～10月11日（水）

（２）場所

小田原市立城山中学校 体育館

（３）授業者と対象者

授業者　小田原市立城山中学校　教諭　宮里　鷹（筆者）

対象者　第１学年　３組　34名

（４）単元名

Ｂ　器械運動　　ア　「マット運動」

２　検証方法

（１）主なデータの収集方法

ア　アンケート調査

（ア）実態調査アンケート　７月14日（金）

（イ）事前アンケート　　９月５日（火）・９月20日（水）

（ウ）事後アンケート　　10月17日（火）

イ　学習カード

ウ　授業の様子を記録した映像

エ　生徒が自分たちの運動を撮影した映像（※）

※　映像の分析は、筆者と指導主事、指導担当主事の計３名で行った。

（２）固定カメラとプロジェクターの配置方法

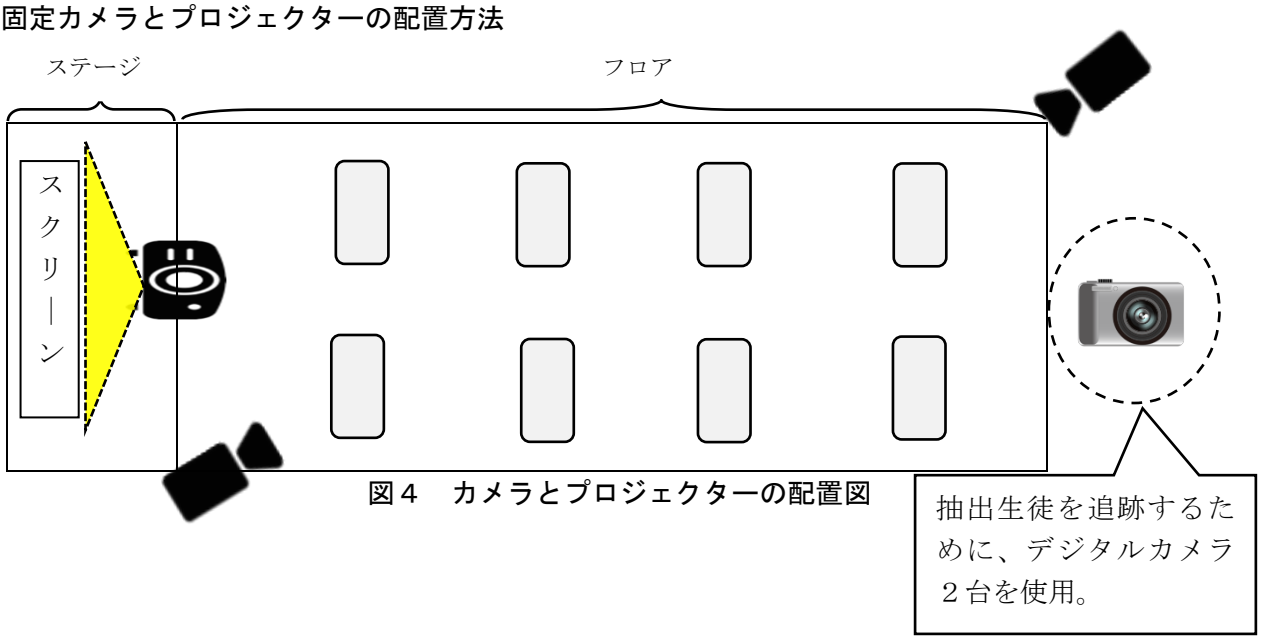


図４　カメラとプロジェクターの配置図

（３）検証の視点と方法

【研究の仮説】

中学校第１学年の「マット運動」（器械運動）において、「共生」「協力」の理解深化を図ること及び、観察シートと動画を活用することによって、協働的な学びが充実し、「分かる」「できる」を実感できるであろう。

【検証の視点と方法】

仮説に基づいて、次の五つの検証の視点を設定した。

ア　生徒は授業をどのように捉えたか
イ　「共生」「協力」の理解深化は図れたか
ウ　観察シートと動画の活用はどうであったか
エ　協働的な学びが充実したか
オ　「分かる」「できる」を実感できたか

ア　生徒は授業をどのように捉えたか

具体的な視点	手掛かり	内容・方法等	
①生徒が毎時間の授業をどのように捉えたか	形成的授業評価（高橋ら2003） 学習カード	成果	1　深く心に残ることや感動することがありましたか。 2　今までできなかったこと(技や動き)ができるようになりましたか。 3　「あっ、わかった！」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。
		意欲・関心	4　精一杯、全力を尽くして運動することができましたか。 5　楽しかったですか。
		学び方	6　自分から進んで学習することができましたか。 7　自分のめあてに向かって、何回も練習できましたか。
		協力	8　友だちと協力して仲良く学習できましたか。 9　友だちとおたがいに教えたり助けたりしましたか。
②マット運動の単元をどのように捉えたか	事後アンケート	自由記述　「今回のマット運動の授業の感想を書いてください」	

イ　「共生」「協力」の理解深化は図れたか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）「共生」の理解深化は図れたか	事前・事後アンケート	・項目：「共生」の意義を説明できますか。（４件法） ・項目（共生）：現在では、共生の視点を持つことが求められています。共生の視点を持つことで、体育の授業では具体的にどのような行動が出現されると思いますか。
（イ）「協力」の理解深化は図れたか		・項目：「協力」の意義を説明できますか。（４件法） ・項目（協力）：協力の視点を持つことで、体育の授業では具体的にどのような成果が生まれると思いますか。

ウ　観察シートと動画の活用はどうであったか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）観察シートが有効に活用されたか	事後アンケート	・項目：観察シート（演技構成シートも含む）は活用しましたか。（４件法）
		・項目：観察シート（演技構成シートも含む）は技のポイントが分かることに役立ちましたか。（４件法）
		・項目：観察シート（演技構成シートも含む）は課題が分かることに役立ちましたか。（４件法）
		・項目：観察シート（演技構成シートも含む）は成果が分かることに役立ちましたか。（４件法）
（イ）見本動画が有効に活用		・項目：見本動画は活用できましたか。（４件法）
		・項目：見本動画は技のポイントが分かることに役立ちましたか。

されたか		（４件法）
		・項目：見本動画は課題が分かることに役立ちましたか。（４件法）
		・項目：見本動画は成果が分かることに役立ちましたか。（４件法）
（ウ）試技動画が有効に活用されたか		・項目：自分を撮影した動画は活用しましたか。（４件法）
		・項目：自分を撮影した動画は技のポイントが分かることに役立ちましたか。（４件法）
		・項目：自分を撮影した動画は課題が分かることに役立ちましたか。（４件法）

エ　協働的な学びが充実したか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）協働的な学びが実現したか	事後アンケート	・項目：ペアの仲間と関わること（補助や助言《称賛や励ましを含む》等）ができましたか。（４件法）また、具体的にどのような関わり合いがありましたか。（自由記述）
		・項目：グループの仲間と関わること（補助や助言《称賛や励ましを含む》等）ができましたか。（４件法）また、具体的にどのような関わり合いがありましたか。（自由記述）
		・項目：ペアの仲間との関わり合いは課題解決に役立ちましたか。（４件法）また、回答の理由を記載してください。（自由記述）
		・項目：グループの仲間との関わり合いは課題解決に役立ちましたか。（４件法）また、回答の理由を記載してください。（自由記述）
（イ）協働的な学びの具体はどうであったか	学習カード（３・４・６・７時間目）に記入	・項目：自分が行った補助やアドバイスを記載してください。
		・項目：メンバーから行ってもらった補助やアドバイスを記載してください。

オ　「分かる」「できる」を実感できたか

具体的な視点	手がかり	内容・方法等
（ア）「分かる」を実感したか	事前・事後アンケート	・項目：各技の行い方のポイントについて１～５の中から選んで○をつけてください。 選択肢１：やったことがない　選択肢２：分からない 選択肢３：あまり分からない　選択肢４：少し分かる 選択肢５：よく分かる
（イ）「できる」を実感したか	動画	・各技の習得状況 ・各タブレットで撮影した動画の分析を行う（技能習得状況） ・技の出来映えの向上 ・技のつながりがスムーズにできたか。
	事前・事後アンケート	・項目：各技の習得状況について１～５の中から選んで○をつけてください。 選択肢１：やったことがない　選択肢２：できたことがない 選択肢３：補助等があればできる　選択肢４：できる 選択肢５：何回やってもできる

３　単元指導計画

（１）単元の目標

ア　知識及び技能 　次の運動について，技ができる楽しさや喜びを味わい，器械運動の特性や成り立ち，技の名称や行い方，その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに，技をよりよく行うことができるようにする。 　マット運動では，回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと，条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることができるようにする。
イ　思考力，判断力，表現力等 　技などの自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
ウ　学びに向かう力，人間性等 　器械運動に積極的に取り組むとともに，よい演技を認めようとすること，仲間の学習を援助しようとすること，一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることなどや，健康・安全に気を配ることができるようにする。

（２）評価の観点及び趣旨

体育分野　第１学年及び第２学年

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	各運動の特性や成り立ち，技の名称や行い方，伝統的な考え方，各領域に関連して高まる体力，健康・安全の留意点についての具体的な方法及び運動やスポーツの多様性，運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方についての考え方を理解しているとともに，各領域の運動の特性に応じた基本的な技能を身に付けている。	運動を豊かに実践するための自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて，課題に応じた運動の取り組み方や目的に応じた運動の組み合わせ方を工夫しているとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう，公正，協力，責任，共生などに対する意欲をもち，健康・安全に留意して，学習に積極的に取り組もうとしている。

（３）内容のまとまりごとの評価規準

体育分野　第１学年及び第２学年　Ｂ　器械運動（マット運動のみ記載）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ・器械運動の特性や成り立ち，技の名称や行い方，その運動に関連して高まる体力などについて理解している。 ○技能 ・マット運動では，回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと，条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることができる。	・技などの自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことを他者に伝えている。	・器械運動に積極的に取り組むとともに，よい演技を認めようとすること，仲間の学習を援助しようとすること，一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとすることなどや，健康・安全に気を配ったりしている。

（４）単元の評価規準（器械運動：マット運動）

知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ①器械運動には多くの「技」があり，これらの技に挑戦し,その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて，言ったり書き出したりしている。 ②技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントがあることについて，学習した具体例を挙げている。	○技能 ①体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で，基本的な技の一連の動き方を滑らかにして回ることができる。 ②全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方，回転力を高めるための動き方,起き上がりやすくするための動き方で，基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができる。 ③バランスよく姿勢を保つための力の入れ方，バランスの崩れを復元させるための動き方で，基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができる。	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に，仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②提供された練習方法から，自己の課題に応じて技の習得に適した練習方法を選んでいる。 ③体力や技能の程度，性別等の違いを踏まえて，仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け，仲間に伝えている。	①器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。 ②練習の補助をしたり仲間に助言したりして，仲間の学習を援助しようとしている。 ③一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。 ④健康・安全に留意している。

（５）単元の概要

時間（日付）	1（９／20）	2（９／22）	3（９／27）	4（９／29）	5（10／３）	6（10／４）
学習のねらい	積極的に学習に取り組もう マット運動の学習の見通しを持とう		自己の課題解決に向けて、活動を工夫して取り組もう 仲間の課題解決に向けて、関わりながら取り組もう			
	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認
5	オリエンテーション	動きづくりの運動 （主運動につながる運動） ゆりかご、背支持倒立、 クマ歩き、蛙の足打ち、 腕支持での川跳び、手押し車		動きづくりの運動 （主運動につながる運動） グループ内で話合い、 実施する運動を決める		
10	・単元の説明 ・マット運動の特性を理解する ・安全面についての指導					
15				ペアで接転技群の練習	ほん転技群と平均立ち技群の学習（場の工夫の紹介も含む）	ペアでほん転技群と平均立ち技群の練習
20	動きづくり ・主運動につながる運動	「協力」 フェアプレーニュースを活用し、「協力」の意義を理解する	「共生」 フェアプレーニュースを活用し、「共生」の意義を理解する			
25				グループで接転技群の練習（撮影・助言を含む）	グループでほん転技群と平均立ち技群の練習（撮影・助言を含む）	グループでほん転技群と平均立ち技群の練習（撮影・助言を含む）
30	今できる三つの技で演技を行い、グループの仲間で撮影を行う	今できる三つの技で演技を行い、グループの仲間で撮影を行う	接転技群の学習（場の工夫の紹介、観察シートの説明も含む）			
35			グループで接転技群の練習（撮影・助言を含む）			
40	本時のまとめ ・振り返り ・学習カードの記入 ・次時の学習の確認 ・体調確認、挨拶					
45						
50						

評価機会							
知・技	知		①◎				②◎
	技			①○	①●	②○③○	
思・判・表				①◎	②◎	③◎	
主体的態度		④◎	②○	③○	①○		③●

○：指導日　●：評価日　◎指導日＋評価日

評価方法

知・技（知）	学習カード	知・技（技）	観察
思・判・表	観察・学習カード	主体的態度	観察・学習カード

時間 （日付）	7 （10／６）	8 （10／10）	9 （10／11）
学習のねらい	「技の雄大さ」と「技のつながり」を意識して取り組もう	個人の学習成果を撮影し、グループ内で発表しよう	学習成果発表会を通して、自他の活動に触れ、認め合う心を育む
	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認	挨拶 体調確認 本時の確認
5 10	動きづくりの運動 （主運動につながる運動） グループ内で話し合い、実施する運動を決める		
15 20	「技の雄大さ」「技のつながり」	個人の学習成果を撮影する	学習成果発表会
25 30	・「技の雄大さ」「技のつながり」について、参考になる映像を視聴し、自己の演技に生かす ・「技の雄大さ」「技のつながり」を意識して、実際に三つの技を組み合わせて実施する	・グループで撮影し、作品を完成させる。その際に、ペアの仲間のシナリオ原稿を二人で考え、発表前に伝える	・他のペアと、互いに発表したり発表を聞いたりする ・互いの発表を見合った後、一言メッセージを記入し、発表者に渡す
35		グループ内発表 ・グループ内で互いに作品を見せ合う	ワンチャレ！ ・仲間の発表を見て、最後にもう一度自分の演技を実施する
40 45 50	本時のまとめ ・振り返り ・学習カードの記入 ・次時の学習の確認 ・体調確認、挨拶		単元のまとめ ・振り返り ・学習カードの記入 ・単元の総括 ・体調確認、挨拶
評価機会 知・技 知			総括的評価
評価機会 知・技 技	②●	③●	
評価機会 思・判・表			
評価機会 主体的態度	②●	①●	

○：指導日　●：評価日　◎指導日＋評価日

評価方法

知・技（知）	学習カード	知・技（技）	観察
思・判・表	観察・学習カード	主体的態度	観察・学習カード

４　学習指導の工夫

（１）「共生」「協力」の理解深化のための工夫

ア　フェアプレーニュースの活用

「共生」「協力」の理解深化をすることで一人ひとりが違うことを受容し、仲間の取組を認めることができるようになったり、補助や助言を通して仲間の成長に関わることができるようになったりすると考えた。

そこで、「共生」「協力」の意義を理解するための手立てとして、公益財団法人日本スポーツ協会が発行しているフェアプレーニュースを活用することとした。

フェアプレーニュースは、「フェアプレーで日本を元気に」を合言葉に、スポーツを通じて育まれるフェアプレーが、社会を元気にする人づくり、地域づくり、国づくりに貢献し、日本社会を元気にしていくことを目指して、日本スポーツ協会が発行しているものである。全国の小・中学校に壁新聞として配布されており、本校では、体育館の壁面に掲示している。

本研究では、そのうち、「共生」「協力」について記載された題材をピックアップして活用した。「協力」については、図５を２時間目の冒頭に生徒に配布し、仲間の学習を援助したり、アドバイスしたりすることで、仲間と一緒に成長していくことの大切さを指導した。また、「共生」については、図６を３時間目の冒頭で生徒に配布し、仲間の挑戦を認めることや、仲間を思いやる大切さについて指導した。

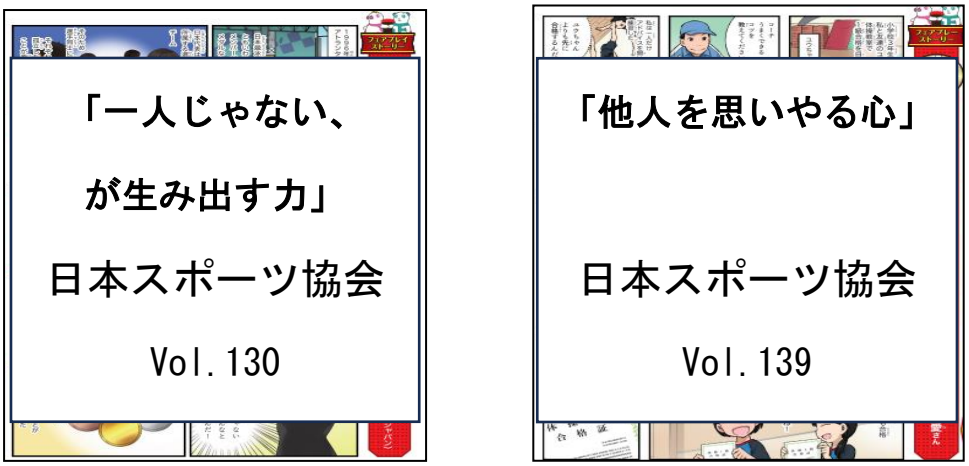


図５　「協力」の視点を題材にしたフェアプレーニュース

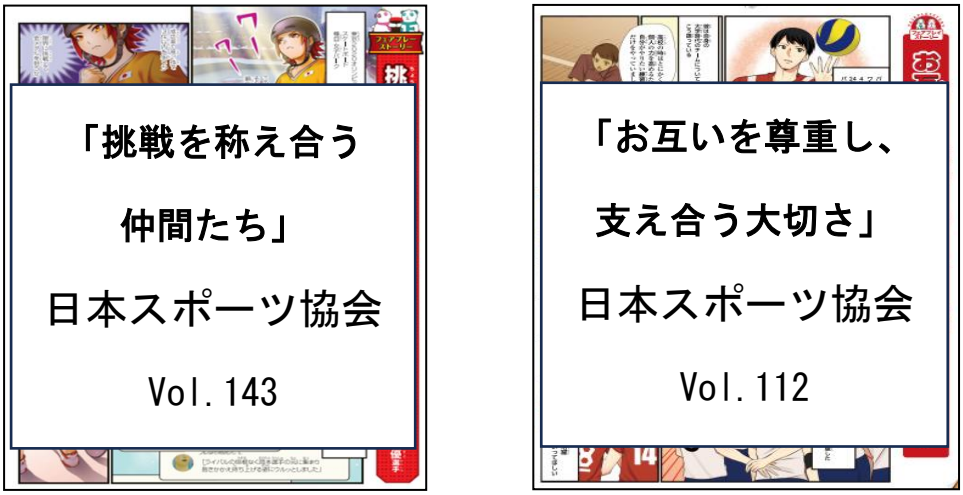


図６　「共生」の視点を題材にしたフェアプレーニュース

イ　学習カードの工夫

本研究では、図７のような学習カードを毎時間活用した。太枠内は、ペアでの活動時間を十分に設定した（約25分）３、４、６、７時間目に設けた項目である。仲間との助言やアドバイスについて振り返ることで、ペアやグループの仲間との関わりから、「共生」「協力」について意識することができるようにした。

月　　日（　）天気：（　　）

本日の体調に〇をつけよう：良いよ～☺ まあまあ😐いまいち😣（その理由　　）

マット運動学習カード（第４時）

１年　　組　　番 名前

～本日の学習のねらい～

〇接転技の中で挑戦したい技を選び、出来映えを高めよう！

〇接転技の課題解決に向けて、練習方法を選んで取り組もう！

◎今日の学習であなたはどんな技に挑戦しましたか。その課題と練習方法、成果を書いてください。

取り組んだ技	課題	取り組んだ練習方法	成果

◎あなたは、ペアの子や仲間にどんな補助やアドバイスをしましたか？

実施した補助

実施したアドバイス

◎ペアの子や仲間からどんな補助やアドバイスをしてもらいましたか？

実施してもらった補助

実施してもらったアドバイス

図７　第４時の学習カード

ウ　学習カードの記入コメントのフィードバック

図８は、生徒が授業の振り返りとして記入した学習カードの記述内容から、「共生」「協力」の視点について書かれた言葉を、次時の冒頭でスクリーンに投影し全員に共有したものである。フェアプレーニュースで示した例は、マット運動以外の題材が多かったため、マット運動での「共生」「協力」をイメージできるように生徒が記述した言葉を基に作成し、２時間目に学習した「協力」、３時間目に学習した「共生」について、４時間目以降、授業の冒頭でフィードバックした。

生徒は、学習を進める中で、仲間の存在の大切さに気付いたり、一緒になって成長していることを実感したりしている言葉が見られるようになった。

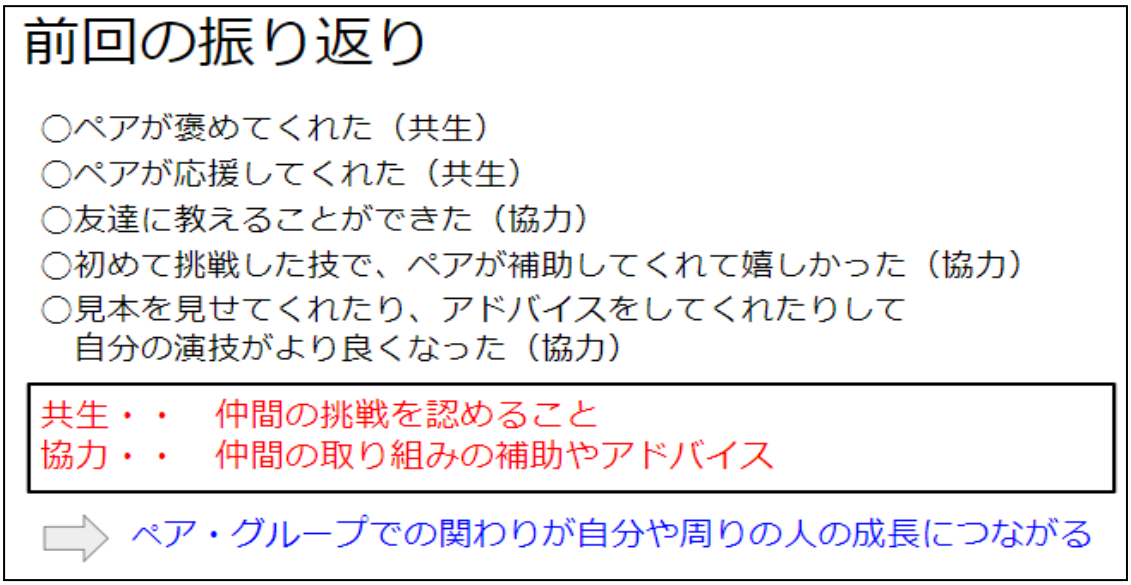


図８　「共生」「協力」について書かれた学習カードのフィードバック

エ　ペア及びグループ編成とそれぞれの活動の工夫

グループ編成は、活動時に補助を行うことを考慮し、体格差が少ない男女ペアの方が良いと考えて、男女別に身長順で男女各２名ずつのペアを作った。その後、性別、能力差等に関わらず、協働的な学びが行えるようにしたいと考え、男女を組み合わせた４名の８グループを編成した。

編成にあたっては、できるだけスムーズにグループ活動が行えるようにするため、日頃の生徒の人間関係等を知っている学級担任の意見も参考にした。

ペアによる活動では、補助や助言を行えるように、観察シートやタブレット端末を用いて学習することを促した。

グループによる活動では、協働的な学びがより充実するように、毎時間の動きづくりの運動を行ったり、授業の始まりと終わりにグループのメンバー同士で、これまでに取り組んできた技を見合い、助言等を行ったりした。

（２）技のポイントや成果と課題を共有する観察シートの工夫

ア　観察シート

図９～図11は、技のポイントと、成果と課題を共有するための工夫として筆者が考案した「観察シート」である。工夫した点は四点あり、一点目は、各技のポイントを明確にするために、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編』に記載されている技の例示を参考にして、授業内で扱う全22種類の技ごとに技のポイントを二つから四つ記載したことである。これにより、「分かる」ための伝え合う内容が共通化され、助言が行いやす

くなると考えた。二点目は、二次元コードを読み込むと、スポーツ庁の「小学校体育（運動領域）指導の手引　動画資料」の動画を視聴できるようにし、いつでもどこでも知識にアクセスできるようにしたことである。これにより、理想とする姿を授業中はもちろん、授業以外の時間でも容易に入手することができると考えた。三点目は、ペア同士で動きを観察し、達成できている項目にチェックを付けるようにしたことである。これにより、成果と課題が明確になり、課題解決に向けた取組を検討しやすくなると考えた。四点目は、より良い動きにつなげるためのアドバイスを記入できるようにしたことである。これにより、助言や励ましの言葉を書いて残すことができるようにした。

図９　観察シート（接転技群）

図10　観察シート（ほん転技群）

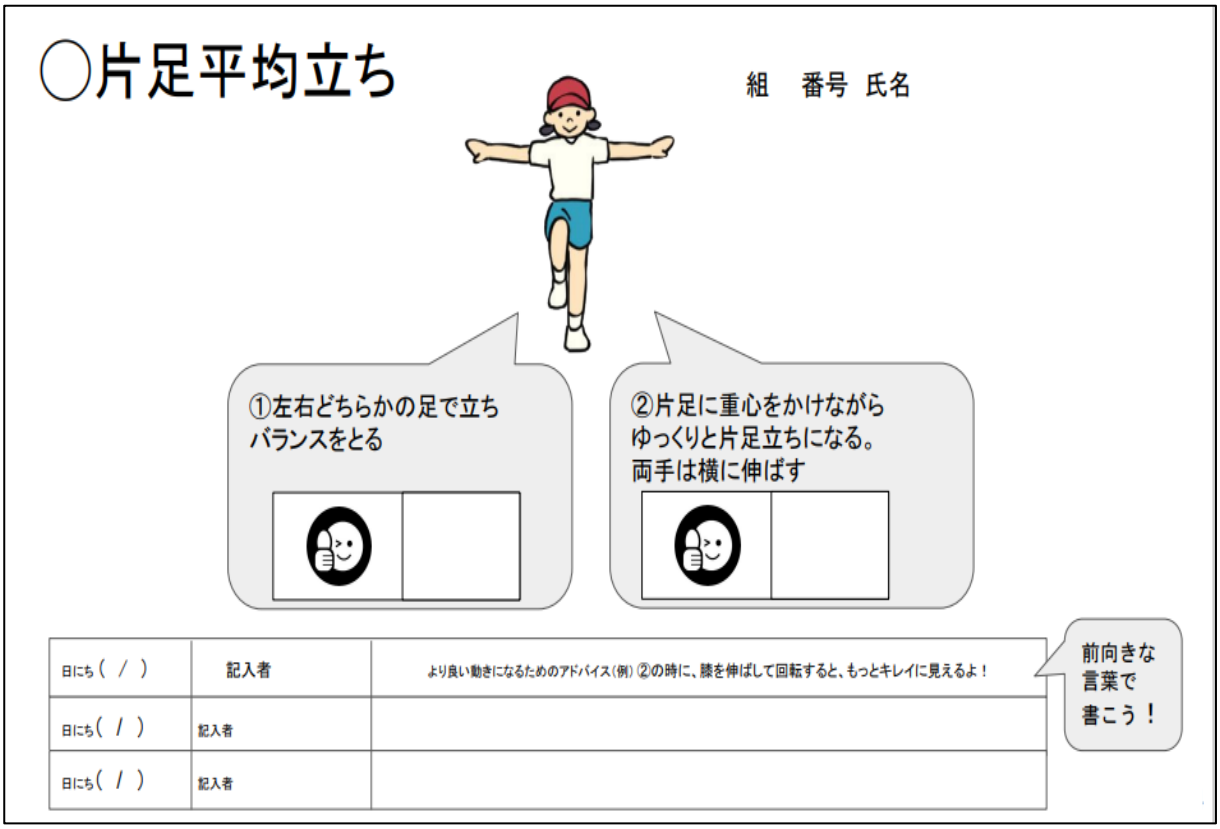


図11　観察シート（平均立ち技群）

イ　演技構成シート

図12は、７時間目の授業において、「技の雄大さ」「技のつながり」について指導した際に活用した演技構成シートである。

活用した意図としては、技の難易度だけではなく、一つひとつの技の出来映えや、技と技のつながりという観点もマット運動において大切なポイントということを伝えるためである。「技の雄大さ」と「技のつながり」の具体的な事項を記載し、グループ内で演技を見合い、仲間との関わり合いの中で、より良い演技を目指していけるようにした。

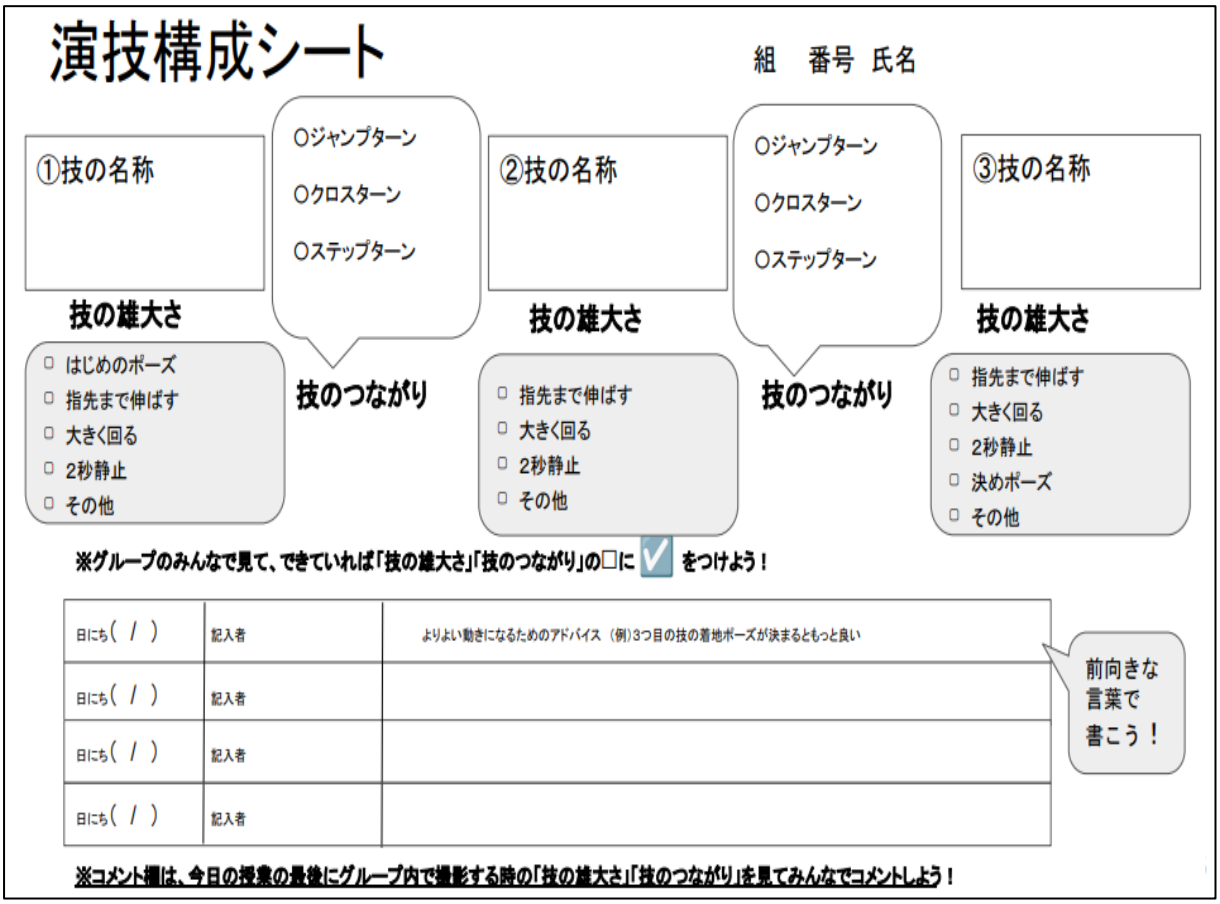


図12　演技構成シート

（３）成果と課題を共有できる動画の工夫

ア　見本動画

各技の観察シートに、スポーツ庁の「小学校体育（運動領域）指導の手引き～楽しく身に付く体育の授業～」にある二次元コードを載せて、生徒自身が見たいタイミングで視聴できるようにした。また、ほん転技を学習する際に、見本動画の活用の仕方について、共有するために、５時間目の授業の冒頭において、全体で視聴した。

イ　試技動画

自分の動きをペアに撮影してもらい、自分自身で見ることで、客観視することができ、成果と課題に気付くことができるのではないかと考えた。単元内では、技の習得に取り組む時間であれば、いつでも撮影できるようにした。

（４）観察シートと動画を併用すること

本研究では、成果と課題を共有する手立てとして、「観察シート」と「動画」を活用した。これらを単独で活用するのではなく、併用することで、より効果的に成果と課題の把握ができるのではないかと考え、６時間目の授業の冒頭で、図13のスライドを用いて併用する際の留意点等の指導を行った。

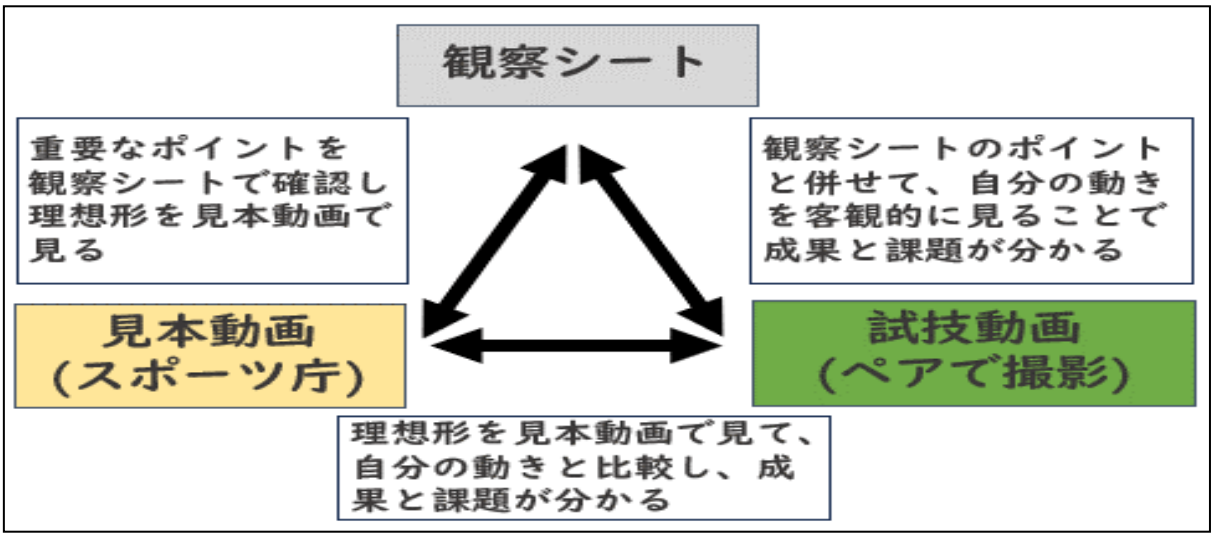


図13　観察シートと動画の併用について

（５）その他の工夫

ア　動きづくりの工夫

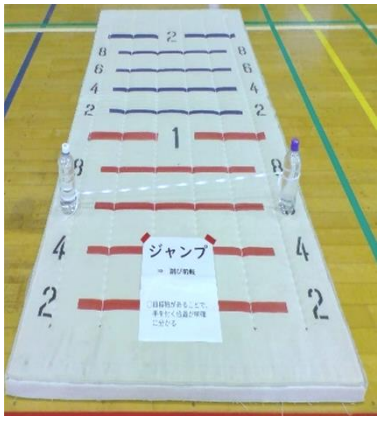
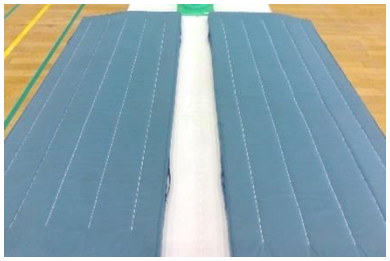
本研究では、準備運動を兼ねて、必要な運動のイメージを持たせるために、毎時間、グループ内で動きづくりの運動を行うこととした。単元の３時間目までに表４に示した８種類の動きを指導し、４時間目以降は、グループ内で話し合い、どの動きを実施するか、グループのメンバーで決定するようにした。なお、前転グループは前転と開脚前転、後転グループは、後転と開脚後転のいずれかを行うようにした。

表４　「動きづくりの運動」で扱った運動・意識するポイント

運動	生徒が意識するポイント
ゆりかご	順次接触と、勢いをつけて起き上がる体の使い方
背支持倒立	足を高く上げて、後頭部や肩で体を支える感覚
クマ歩き	四肢で体を支え、腰の位置を頭より高く上げる感覚
蛙の足打ち	腕で体を支え、背中を伸ばし、両足を上げる感覚
腕支持での川跳び	腕で体を支え、腰を上げて重心を移動させる感覚
手押し車	腕で体を支え、体幹に力を入れる感覚
前転グループ	順次接触や、手の着き方、回転速度など
後転グループ	手の着き方、回転速度など

イ　場づくりの工夫

各技の習得につなげるために、図14のような意識してほしいポイント等を盛り込んだ場の設定を行った。本単元では、生徒自身が実施する技を決定したため、場の活用については、生徒が自らの課題に応じて選択して取り組めるようにした。単元の前半で、場ごとの行い方と効果を生徒に説明し、生徒が活用できるようにした。

場の名称と写真	行い方と期待される効果	適応技
城山の山	○マットに着手して体を支え、足裏で跳び箱を蹴るように踏み切り、腰が高い位置から回転する	前転グループ
	○腰を高くして回ることができる ○腕支持の感覚が分かる ○マットを蹴る感覚が分かる	
 **城山ジャンプ**	○両端に置いたペットボトルにゴム紐を掛け、前方に置き、それを越えるように踏み切り、跳び前転をする	跳び前転
	○距離の目安が分かり、より遠くへ跳ぶことを意識することができる。また、ペットボトルに紐をかけた具体物を置く位置を変えることで、高く跳んだり、遠くへ跳んだりすることを意識することができる	
 **城山の溝**	○溝の間を転がり、両側のマットに着手するように後転する	後転グループ
	○頭部を溝に入れることで、頭部が安定し、後転グループの技に取り組みやすくなる	
城山の坂道	○マットの下にロイター板を置き、傾斜をつけ、勢いよく回転する	開脚前転 開脚後転 伸膝前転 伸膝後転
	○傾斜があることで、回転速度を上げて回ることができる	

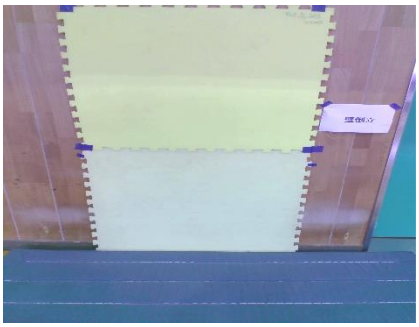
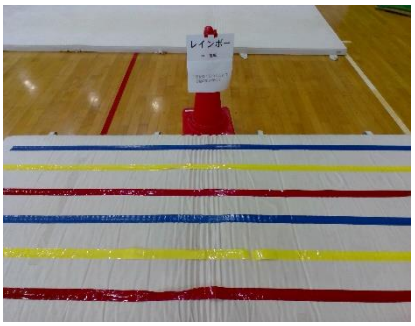
	**城山の壁**	○壁面にウレタンマットを貼り、床にマットを置いて、壁倒立を行う	壁倒立
		○壁に踵をぶつけた際の衝撃を和らげるとともに、恐怖心を軽減することができる	
	**城山の虹**	○後転をする際に、マットに等間隔に貼られたラインテープを意識して、遠くに尻を着いて後転を行う	後転グループ
		○尻を遠くに着くことで、大きく回ることができるとともに、回転速度を上げて回ることができる	
	城山のゴム紐	○鈴が付いたゴム紐を足先で触るように回転する	側方倒立回転 側方倒立回転跳び1/4ひねり（ロンダート）
		○ゴム紐を触るように意識することで、足を上方に上げて回ることができる	

図14　各技の習得につなげるための場の設定

ウ　学習成果発表会の工夫

本単元では、筆者のこれまでの課題であった、演技を見せる際に生徒が持つ羞恥心を払拭できなかったことを改善するために、動画を用いた学習成果発表会を行うこととした。

動画を用いた学習成果発表会とは、単元を通して生徒が取り組んだ技の中から今できる三つの技を選び、（生徒の実態を踏まえて、三つの技の中には同一の技を２回まで行うことも可とした。例　前転→前転→後転）演技を構成することにした。単元の終末に、構成した技をペアの生徒に撮影してもらい、学習成果発表会の資料とした。動画は試技者が納得いくまで何度でも撮影できることとした。こうすることで、一番良いと考える演技を発表することができると考えた。

学習成果発表会は、ポスターセッションの形態をとり、ペアの生徒と一緒に動きながら、他のペアと四人組になり、互いに発表できるようにした。

このような発表形態をとることで、みんなの前で演技をすることに抵抗がある生徒でも、羞恥心が軽減でき、より前向きに取り組めるのではないかと考えた。

また、学習成果発表会では、発表する生徒が単元を通して学んだことや、取り組んできた様子をペアの生徒が紹介する時間（紹介シナリオ）を設定した。

５　授業の実際

【本時の展開】（１／９時間目）　９月20日（水）　１校時（８:45～９:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉器械運動には多くの「技」があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、理解できるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉提供された練習方法から、自己の課題に応じて技の習得に適した練習方法を選ぶことができるようにする。

〈学びに向かう力、人間性等〉健康・安全に留意することができるようにする。（評価：本時）

（２）本時の評価

〈主体的に学習に取り組む態度④〉健康・安全に留意している。（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ15分	1　挨拶・体調確認 2　学習の確認 ・単元の説明を聞き、学習の見通しを持つ。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○単元の目標や活動の見通し、本時のねらいに関する内容について説明し、本単元の学習の見通しを持たせる。
	マット運動の学習の進め方を理解して、学習の見通しを持ち、健康・安全に留意しよう	
	3　オリエンテーション ・授業での約束について知る。（安全面含む） ・マット運動の特性について知る。 ・グループのメンバーを確認する。 ・場の設定について確認する。	指導　学びに向かう力、人間性等④ ○活動する上での安全面、仲間と取り組む際の配慮事項等、授業を行う際の約束事を確認する。 ○本時は教師がマットを準備する。次時以降は、グループごとに準備・片付けを行うように伝える。 ○安全な準備と片付け方を確認する。
なか30分	4　動きづくりの運動 ・準備運動を行う。 ・主運動につながる動きを行う。 ・クマ歩き ・ゆりかご ・アンテナからの起き上がり ・カエルの足打ち ・川跳び ・見本動画を見て、活動のイメージを持つ。 ・クロームブックでの撮影方法について確認する。 5　マット運動 ・既習技に挑戦する。 ・動画撮影を行う。	○次時以降も、継続して主運動につながる動きを行うことを確認する。 ○見本動画を視聴させ、活動イメージを持たせる。 ○実施者のクロームブックを仲間に渡し、撮影するように伝える。 ○三つの技を設定できない生徒もいることが予測できるため、同一の技を２回実施するのは可と伝える。 ○四人グループに分かれ、三つの技を組み合わせて演技を行うように伝える。 ○撮影した動画を観察するのは、「まとめ」の時間で確保していることを伝え、今は、活動時間を確保することを説明する。 評価　主体的に学習に取り組む態度④　【観察】
まとめ10分	6　場の片付け・整理運動 7　本時のまとめ ・動画の提出をする。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○自分の動画を提出するように伝える。 ○本時の学習の振り返りを記入するように伝える。 ○次回の学習も、動画撮影を行うことを伝える。 ○本時の活動の良い点を伝え、次時につなげる。 評価　主体的に学習に取り組む態度④　【学習カード】
	8　挨拶・体調確認	○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

９時間単元の導入として、学習の見通しを持つことと、安全面の指導を重点的に行った。学習の見通しを持つことについては、見本動画を見せ、三つの技を行うことを示し、自分が実施したい技を考えさせた。安全面については、事故の未然防止のための約束事を確認したことで、生徒は活動する前に、場の安全を確認しながら活動することができていた。

【研究の視点からの振り返り】

生徒一人ひとりが、自分ができる技を組み合わせて活動することができた。実施する技を決める際に、グループの仲間と話をする中で、小学校での学習を思い出して取り組む生徒も見られた。また、グループの仲間と協力して活動場面を撮影し、声を掛け合う生徒の姿が見られた。

【本時の展開】（２／９時間目）　９月22日（金）　１校時（８:45～９:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉器械運動には多くの「技」があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、理解できるようにする。（評価：本時）

〈思考力、判断力、表現力等〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。

〈学びに向かう力、人間性等〉練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。（評価：８/９）

（２）本時の評価

〈知識①〉器械運動には多くの「技」があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、言ったり書いたりしてする。【学習カード】（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ15分	1　挨拶・体調確認 2　マットの準備 3　前時の振り返りと本時の説明	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。
	フェアプレーニュースを読み、「協力」の意義について理解し、今後の学習に生かそう マット運動の楽しさや喜びについて理解しよう	
	4　「協力」の意義の理解 ・フェアプレーニュースを読み、「協力」の意義について考える。	指導　学びに向かう力、人間性等② ○１時間目の振り返りカードと、フェアプレーニュースを用いて、「協力」の視点を指導し、ペアやグループで活動する際の関わりについて伝える。
なか30分	5　動きづくりの運動 ・準備運動を行う。 ・主運動につながる動きを行う。 ・クマ歩き ・ゆりかご ・アンテナからの起き上がり ・カエルの足打ち ・川跳び	○教師が見本を示しながら主運動につながる動きを確認する。
	6　見本動画の視聴 ・見本動画を見て、技の確認を行う。 7　中学校で学習する技一覧の確認 ・中学校で学習する技の系統表を見て、自分が今できる技や、これから挑戦してみたい技をイメージする。 8　観察シートを活用して既習技の確認 ・今できる技の観察シートを活用して、技のポイントを確認する。 9　動画撮影 ・グループに分かれ、個人で決めた三つの技を一連の動きで行い、互いに撮影する。	指導　知識及び技能① ○見本動画を視聴すること、技一覧を確認することで、マット運動には多くの「技」があることを理解できるようにする。また、技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて伝える。 ○グループで活動している際に、協力して取り組む姿を取り上げ、称賛する。
まとめ5分	10　本時のまとめ ・動画の提出をする。 ・学習カードに振り返りを記入をする。 ・次時の学習について確認をする。 11　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○自分の動画を提出するように伝える。 ○本時の学習の振り返りを記入するように伝える。 評価　知識・技能（知識）①【学習カード】 ○次回の学習から、技の習得に取り組むことを伝える。 ○本時の活動において、「協力」のよかった点を取り上げて次時以降の活動に生かすことができるようにクラス全体に伝える。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

「協力」の意義についてフェアプレーニュースの記事を活用して生徒に考えさせた。グループでマットを準備したり、タブレットの操作を教えたりするなど、活動場面で協力して取り組む姿が見られた。各技の成果や課題を共有できる観察シートの活用方法について伝え、ペアの生徒と互いに技を見合うことができた。

【研究の視点からの振り返り】

互いの技を見て助言をする際に、各技の成果や課題を共有できる観察シートを用いることで、見る視点が明確になり、助言をしやすくなったと考える。また、自分の技の向上だけではなく、仲間と「協力」しながら、互いの成長にも関与する大切さを学び、互いに関わる場面が多く見られた。

【本時の展開】（３／９時間目）　９月27日（水）　１校時（８:45～９:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で、基本的な技の一連の動き方を滑らかにして回ることができるようにする。（評価：４/９）

〈思考力、判断力、表現力等〉提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。（評価：本時）

〈学びに向かう力、人間性等〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。（評価：６/９）

（２）本時の評価

〈思考・判断・表現①〉提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えることができるようにする。（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ10分	1　挨拶・体調確認 2　前時の振り返りと本時の説明 3　マットの準備 4　動きづくりの運動 ・準備運動を行う。 ・主運動につながる動きを行う。 ・ゆりかご ・クマ歩き 5　基本的な接転技群の技について ・基本的な接転技群の動き方や、技のポイントについて確認して、活動する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○教師が見本を示しながら主運動につながる動きを確認する。 ○前転や開脚前転、後転や開脚後転について確認する。
なか30分	フェアプレーニュースを読み、「共生」の意義について理解し、今後の授業に生かそう 観察シートを活用し、ペアに課題や成果を伝えよう 6　「共生」の意義の理解 ・フェアプレーニュースを読んで、「共生」の意義について考える。 7　場の工夫の確認 ・各場の工夫の説明を聞いて、自分の課題に応じて選択する。 ・共生の視点を持ち、一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を認めることができるよう、ペアで活動する。 ・活動する際、観察シートに書かれている技のポイントを意識して実技・アドバイス・補助をする。	指導　学びに向かう力、人間性等③ ○フェアプレーニュースを用いて、「共生」の視点を指導し、一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を認める態度を伝える。 指導　知識及び技能（技能①） ○場の工夫を施した活動の意図を伝える。 ○各技のつまずきやすいポイントや上達のコツを伝える。 ○補助倒立前転、跳び前転、後転倒立の順に教師が見本を示しながら確認する。 指導　思考力、判断力、表現力等① ○観察シートの説明をし、ペアの生徒に成果や課題を伝えるよう確認する。
まとめ10分	8　場の片づけ・整理運動 9　本時のまとめ ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。 10　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 評価　思考・判断・表現①【学習カード】 ○ペアの生徒の成果や課題を伝えることができたか、また伝えた内容について具体的に記入するよう伝える。 ○次時も接転技群について活動を行うことを伝え、活動の見通しを持つことを確認する。 ○本時の活動において、「共生」の良かった点を取り上げて、次時以降の活動に生かすことができるようにクラス全体に伝える。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

フェアプレーニュースを活用して、「共生」の視点を生徒に考えさせ、これからの学習につなげていけるように意識づけを行った。本時から接転技群の活動に入るため、各技のつまずきやすいポイントや技能のコツを見本を示しながら指導を行った。また、技ごとの観察シートを活用し、ペアで互いの動きを見ながら取り組むように伝えたが、活動することへの意識が強く、観察シートの活用が不十分だったため次回以降の課題である。

【研究の視点からの振り返り】

互いの活動に対して称賛の声を掛ける姿が見られるなど、本時の最初に実施した共生の視点を意識した声掛けの場面を見ることができた。また、前時に意識付けをした協力についても、ペア活動を行う際に、補助をしたり、仲間の取り組みに助言をしたりする姿が見られた。

【本時の展開】（４／９時間目）　９月29日（金）　１校時（８:45～９:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で、基本的な技の一連の動き方を滑らかにして回ることができるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉提供された練習方法から、自己の課題に応じて技の習得に適した練習方法を選んでいる。（評価：本時）

〈学びに向かう力、人間性等〉器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。（評価：８/９）

（２）本時の評価

〈知識・技能①〉体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で、基本的な技の一連の動き方を滑らかにして回ることができる。（指導：３/９）

〈思考・判断・表現②〉提供された練習方法から、自己の課題に応じて技の習得に適した練習方法を選んでいる。（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ10分	1　挨拶・体調確認 2　マットの準備 3　前時の振り返りと本時の説明 4　動きづくりの運動 ・取り組む運動は、グループで決定する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○前回の振り返りカードを用いて、関わる場面の工夫について紹介し、本時につなげる。 ○主運動につながる動きを、班のメンバーで決めて行うように説明する。 ○安全面に留意することを確認する。
なか30分	接転技群の解決に向けて、練習方法を選んで取り組もう 挑戦したい技を選び、出来映えを高めよう 5　ペア学習・グループ学習について ・ペアやグループで活動する意義を知る。 6　グループ内で共有 ・挑戦したい技（接転技群）とその理由を明確にして、グループ内で伝え合う。 7　グループの場で活動 ・グループ内で互いに技を観察してペアを決定する。 8　ペアで活動 ・各自の課題解決につながるように、観察シートやタブレット端末を活用しながら、助言や、補助を行う。 9　グループで集まって本時の練習の成果を撮影する。 ・グループ内で、本時の取り組みをタブレット端末を活用して撮影し合う。	○ペアやグループで活動する意義を説明し、これからの学習につなげるようにする。 ○個人で取り組む技を決め、その理由をグループで共有することを伝える。 ○試しに取り組みたい技を行い、ペアを決める判断材料とすることを確認する。 ○ペアで行動し、互いの課題解決に向けて取り組むように伝える。 指導　思考力、判断力、表現力等② ○自己の課題に応じて活動場面を選ぶように伝える。 指導　学びに向かう力、人間性等① ○自己の課題に応じて積極的に取り組むように促す。 ○撮影時は、実施者のタブレットを使用して撮影することを伝える。 評価　知識・技能（技能）①【観察】
まとめ10分	10　場の片づけ・整理運動 11　本時のまとめ ・動画を提出する。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。 12　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○巡回し、学習カードの記入をするように伝える。 ○活動の見通しを持たせるため、次時は、ほん転技群について活動することを伝える。 ○本時の活動の良かった点をクラス全体に伝える。 評価　思考・判断・表現②【学習カード】 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

グループの関わりをより深める目的で、「動きづくりの運動」で行う種目を、グループ内で選んで実施する方法に変更したことで、グループの仲間同士の関わる場面が増えた。また、本時は接転技群の解決に向けてペアで活動を選んで取り組んだため、仲間との関わりが今まで以上に多く見られた。課題としては、ペアの生徒との関わりは深まっているが、グループが十分に機能していないため、次回は個人の取り組む課題をグループ内で共有し、解決に向けて、相互に関わりを深めていくようにしていきたい。

【研究の視点からの振り返り】

前時に続いて接転技群を行い、ペアの生徒の課題解決に向けて二人で練習方法を考え、成果と課題を観察シートを活用して伝え合う活動を実施した。ペアの生徒に対して助言をしたり、同じ活動場所で取り組んでいる別の仲間同士で助言や見本を見せ合うなど、仲間と関わる場面は多く見られるようになっている。一方で、自己の課題を明確にしたり、課題解決に適した活動場面を選んだりすることができていない生徒もいるため、教師による指導の必要性や、技の系統性を踏まえて自己の取り組む技を決めさせる等の言葉かけが必要だと感じた。

【本時の展開】（５／９時間目）　10月３日（火）　２校時（９:45～10:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能①〉全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方、回転力を高めるための動き方、起き上がりやすくするための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができるようにする。（評価：７/９）

〈知識及び技能②〉バランスよく姿勢を保つための力の入れ方、バランスの崩れを復元させるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができるようにする。（評価８/９）

〈思考力、判断力、表現力等〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。（評価：本時）

〈学びに向かう力、人間性等〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。

（２）本時の評価

〈思考・判断・表現〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。（指導：本時）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ8分	1　挨拶・体調確認 2　前時の振り返りと本時の説明 3　マットの準備 4　動きづくりの運動 ・取り組む運動は、グループで決定する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○前回の振り返りカードを用いて、関わる場面の工夫について紹介し、本時につなげる。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○主運動につながる動きを、班のメンバーで決めて行うように伝える。 ○安全面に留意することを確認する。
なか32分	ほん転技、平均立ち技のポイントを知り、挑戦したい技を見つけよう 観察シートを用いて仲間と楽しむための練習の方法を見つけよう	
	5　ほん転技群と巧技系について ・技の説明と、場の工夫の紹介を聞く。 6　グループ内で共有 ・各自の取り組む技をグループ内で伝え合う。 7　ペアで活動 ・挑戦したい技を各自が決め、その技の活動場所にペアで行き、活動する。	指導　知識及び技能（技能）①・② ○各技のつまずきやポイントを示し、活動する際に意識するように伝える。 ○側方倒立回転、ロンダート、ハンドスプリング、頭はね起きについて説明を行う。 ○各技に合わせて、場づくりの工夫を伝える。 ○巧技系の技についてスライドを用いて紹介する。 ○個人の取り組む技をグループ内で共有するように伝える。 指導　思考力、判断力、表現力等③ ○観察シートを用いながら、互いに楽しむための練習方法を見つけられるように指導する。
まとめ10分	8　場の片づけ・整理運動 9　本時のまとめ ・グループで振り返りをする。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。 10　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○グループ内で本時の活動の振り返りを行い、課題や練習方法、成果を共有するように伝える。 ○グループでの共有も踏まえて、学習カードの記入をするように伝える。 評価　思考・判断・表現③【学習カード】 ○次時もほん転技群について活動を行うことを伝え、活動の見通しを持たせる。 ○本時の活動の良かった点を、クラス全体に伝える。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

本時からほん転技群と平均立ち技群の活動を行った。接転技群よりも苦手意識の強い生徒が多くいることが予想されたため、本時は仲間とともに楽しく取り組むための方法を見付けたり、主体的に取り組めるために各技に合わせて場の工夫を多く設定した。その効果もあり、生徒が積極的に取り組む姿が多く見られた。一方で、ほん転技群という危険性が高まることへの安全面の指導が欠けていたため、次回以降に指導していきたい。

【研究の視点からの振り返り】

各自の課題に応じた活動場面があり、多くの生徒が意欲的に活動しており、個に適した技に取り組んでいた点は評価できる。一方で、本時は自己の活動だけではなく、他者の取り組みにも関わる時間であり、そのための手立てとなる観察シートの活用が十分にできていなかった。検証授業を通して、徐々に他者との関わりは多く見られるようになってきた。今後は、仲間との関わりをより深めるために、観察シートや見本動画、自分の動きを撮影した動画を活用して、成果や課題に気付き、課題解決のために関わりながら取り組むことができるように指導していきたい。

【本時の展開】（６／９時間目）　10月４日（水）　２校時（９:45～10:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。（評価：本時）

〈思考力、判断力、表現力等〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。

〈学びに向かう力、人間性等〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。

（２）本時の評価

〈知識②〉技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントがあることについて、言ったり書きだしたりしている。【学習カード】（指導：本時）

〈主体的に学習に取り組む態度③〉一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。（指導：３／９）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ8分	1　挨拶・体調確認 2　前時の振り返りと本時の説明 3　マットの準備 4　動きづくりの運動 ・取り組む運動は、グループで決定する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○前回の振り返りカードを用いて、関わる場面の工夫について紹介し、本時につなげる。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○主運動につながる動きを、グループのメンバーで決めて行うように伝える。 ○安全面に留意することを確認する。
なか32分	観察シートを使って、ペアが行っている技のポイントを理解しよう 5　グループ内共有 ・挑戦したい技（ほん転技群と平均立ち技群）とその理由を明確にし、グループで伝え合う。 6　観察シート、見本動画、試技動画について ・それぞれを組み合わせた活用の仕方を知る。 7　ペアで活動 ・ペアの挑戦している技について、観察シートを活用して助言を行う。 8　グループ内共有 ・グループで集まり、本時の練習の成果を共有する。	○観察シートを用いて自己評価を行い、課題を明確にするように伝える。 ○スライドを用いて組み合わせた事例を示し、本時の活動につなげるように確認する。 ○ペアでそれぞれ挑戦したい技を確認するように伝える。 ○ペアでそれぞれ挑戦したい技の課題を把握し、共有するように伝える。 指導　知識及び技能② ○それぞれの技のポイントをよく確認して活動するように伝える。 評価　主体的に学習に取り組む態度③【観察】
まとめ10分	9　場の片づけ・整理運動 10　本時のまとめ ・グループで振り返りをする。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。 11　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 評価　知識・技能（知識）②【学習カード】 ○次時は、「技の雄大さ」と「技のつながり」について実施することを伝える。 ○残り３時間の流れを説明し、次時は、今までの学習を踏まえて、三つの技を組み合わせて活動することを説明し、次時までに三つの技を決めておくことを伝える。 ○本時の活動においての、「共生」「協力」の良かった点を取り上げて、次時以降の活動に生かすことができるようにクラス全体へ伝える。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

本時は、前時から取り組んでいる、ほん転技群と平均立ち技群の課題解決に向けた活動であった。ペアによっては、観察シートや試技動画を撮影して、課題解決に取り組む姿が見られた。また、ペアやグループを越えて、同じ場で活動している仲間との言葉かけは多く見られるようになった。課題としては、観察シートや動画を活用するよりも、実際の動きを見て助言をすることが多かった。次時以降は、お互いに撮影して映像を見合ったり、観察シートを活用して助言することの大切さを伝えていけるような指導をしていきたい。

【研究の視点からの振り返り】

観察シートや見本動画を用いて成果と課題をペアの生徒と共有し、浮き彫りになった課題解決に向けて活動を工夫することができているペアは、成果と課題が明確になり、解決に向けて取り組むことができている。一方で試技動画を活用しているペアは少なかった。自分の動きを撮影し、自分で見ることで、成果と課題が「分かる」ことにつなげ、「できる」ための取り組みを考えていくことを次回以降の授業で伝えていきたい。

【本時の展開】（７／９時間目）　10月６日（金）　１校時（８:45～９:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方、回転力を高めるための動き方、起き上がりやすくするための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉提供された練習方法から、自己の課題に応じて技の習得に適した練習方法を選んでいる。

〈学びに向かう力、人間性等〉練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。

（２）本時の評価

〈技能②〉全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方、回転力を高めるための動き方、起き上がりやすくするための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができる。（指導：５/９）

〈主体的に学習に取り組む態度②〉練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。（指導：２/９）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ10分	1　挨拶・体調確認 2　前時の振り返りと本時の説明 3　マットの準備 4　動きづくりの運動 ・取り組む運動は、グループで決定する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○前回の振り返りカードを用いて、関わる場面の工夫について紹介し、本時につなげる。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○主運動につながる動きを、グループのメンバーで決めて行うように伝える。 ○安全面に留意することを確認する。
なか30分	「技の雄大さ」や、「技のつながり」を意識した演技を創ろう 仲間の演技をよりよくするために積極的に補助や助言をしよう	
	5　三つの技をつなげて挑戦 ・三つの技を仲間に伝え、つなげて試技する。 ・グループの仲間は、役割分担して、補助したり撮影したりする。	○三つの技をつなげて試技するように伝える。 ○場の工夫や補助を用いて実施してもよいことを説明する。 ○試技を行う際には、撮影者、観察者、補助者等の役割を分担するように説明する。
	6　「技の雄大さ」や「技のつながり」について ・技のポイントを知る。 ・演技構成シートを活用して、より良い演技にする。 ・より良い演技を創るため、ペアの演技について、「技の雄大さ」や「技のつながり」を意識して補助や助言をする。	○「技の雄大さ」や「技のつながり」について、演技構成シートを配付し、事例を踏まえて説明する。 ○グループで協力し演技構成シートを用いて「技の雄大さ」や「技のつながり」について意識を持って活動することを確認する。 ○試技を繰り返しながら、演技を高めていけるように伝える。 評価　知識・技能（技能）②【観察】 評価　主体的に学習に取り組む態度② 【観察・学習カード】
	7　グループで撮影 ・グループで集まり、本時の練習の成果を撮影する。その際、役割分担して補助したり撮影したりする。	○撮影は、グループ内で役割分担して、実施者のタブレットを使用して撮影するように説明する。 ○撮影を行う際には、撮影者、観察者、補助者等の役割を分担して行うように確認する。
まとめ10分	8　場の片づけ・整理運動 9　本時のまとめ ・グループで振り返りを記入する。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。 ・キネマスターの活用方法について知る 10　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○形成的授業評価の質問項目６～９を意識して、振り返りを行うように伝える。 ○巡回し、学習カードの記入の様子を見て、適宜声を掛けて振り返りを促す。 ○本時の活動において、「共生」「協力」の良かった点を拾い上げて、全体に伝える。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

本時は、「技の雄大さ」と「技のつながり」について取り組んだ。また、難易度の高い技に取り組む生徒だけではなく、多くの生徒に対して出来映えを追求することへの意識付けにつながったと感じた。その結果として、一つひとつの技の完成だけではなく、三つの技を合わせた演技として意識することができている生徒が多かった。

【研究の視点からの振り返り】

グループ内の撮影は、「技の雄大さ」や「技のつながり」を意識的に観察して実施者に伝える際、演技構成シートを用いてグループ全員で見合い、仲間の学習を援助することにつなげることができた。また、単元前半に学習した「共生」や「協力」の視点を生徒が意識して取り組んでいる姿がグループ内で多く見られるようになった。

【本時の展開】（８／９時間目）　10月10日（火）　３校時（10:45～11:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉バランスよく姿勢を保つための力の入れ方、バランスの崩れを復元させるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。

〈学びに向かう力、人間性等〉器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。

（２）本時の評価

〈知識・技能③〉バランスよく姿勢を保つための力の入れ方、バランスの崩れを復元させるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができる。（指導：５/９時間）

〈思考・判断・表現〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。（指導：５/９時間）

〈主体的に学習に取り組む態度①〉器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。（指導：１/９時間）

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ10分	1　挨拶・体調確認 2　前時の振り返りと本時の説明 3　マットの準備 4　動きづくりの運動 ・取り組む運動は、グループで決定する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○前回の振り返りカードを用いて、関わる場面の工夫について紹介し、本時につなげる。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○主運動につながる動きを、グループのメンバーで決めて行うように伝える。 ○安全面に留意することを確認する。
なか30分	「技の雄大さ」や「技のつながり」を意識した演技を完成させよう 仲間の演技発表をよりよい発表にするために、思ったことや感じたことを伝えよう	
	5　演技の完成と撮影 ・演技構成シートを見ながら、演技の完成を目指す。 ・自分の三つの演技を完成させ、撮影する。 ・グループの仲間は、役割分担して、補助したり撮影したりする。 6　発表動画と紹介シナリオ作成 ・キネマスターを使って、発表動画を作成する。 ・ペアの発表のためのシナリオ原稿を作る。 7　グループ内で発表会 ・次時のリハーサルも兼ねて、グループ内で発表内容を見せ合い、思ったことや感じたことを伝え合う。	○演技構成シートを見ながら演技の完成を目指すことを確認する。 ○試技を行う際には、撮影者、補助者等の役割分担を行うことを確認する。 評価　知識・技能（技能）③【観察】 ○ペアと相談しながら発表動の作成を行うように伝える。 ○シナリオ原稿を作成する際は、学習カードの様式を使用し、ペアで内容を確認し合って作成するように伝える。 ○グループ内での発表会（リハーサル）を通して、思ったこと、感じたことを伝え合うことを確認する。
まとめ10分	8　場の片づけ・整理運動 9　本時のまとめ ・グループで振り返りをする。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・次時の学習について確認する。 10　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○形成的授業評価の質問項目６～９を意識して、振り返るように伝える。 ○巡回し、学習カードの記入の様子を見て、適宜声を掛けて振り返りを促す。 評価　思考・判断・表現③【学習カード】 ○本時の活動において、「共生」「協力」の良かった点を拾い上げて、全体に伝える。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

本時は、三つの演技を完成させ撮影し、その映像を用いて発表動画の作成と、紹介シナリオを作成する活動だった。前時で学習した、「技の雄大さ」と「技のつながり」について再確認することで、より良い演技を創ろうとする意識を持って撮影できたのではないかと考える。また、活動内容が多岐に渡っていたため、教師の指示に沿って活動することが多く、生徒の主体的な活動が限られていたことが課題である。また、撮影時の画角については、実施する技に応じて見る視点が異なるため、立ち位置を変える工夫が必要であった。

【研究の視点からの振り返り

本単元の学習成果発表会では、発表時にペアの生徒の単元を通しての学びを紹介する形で行うこととした。この活動が、仲間との関わりを深める「共生」や「協力」につながる活動である。本時はそのシナリオ原稿をペア同士で考える時間を設定し、仲間の取り組みについて一緒に考える機会となった。

【本時の展開】（９／９時間目）　10月11日（水）　１校時（８:45～９:35）　体育館

（１）本時の目標

〈知識及び技能〉器械運動には多くの「技」があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、理解できるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉体力や技能の程度、性別等のちがいを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えることができるようにする。

〈学びに向かう力、人間性等〉器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。

（２）本時の評価

〈総括的評価〉【観察】【学習カード】

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ7分	1　挨拶・体調確認 2　前時の振り返りと本時の説明 3　マットの準備 4　動きづくりの運動 ・取り組む運動は、グループで決定する。	○生徒の出欠席確認を行い、健康状態を把握する。 ○前回の振り返りカードを用いて、関わる場面の工夫について紹介し、本時につなげる。 ○安全面に気を付けて準備するように伝える。 ○主運動につながる動きを、グループのメンバーで決めて行うように伝える。 ○安全面に留意することを確認する。
なか30分	学習成果発表会では、自分たちのこれまでの学習成果が伝わるような発表をおこなうとともに、仲間の発表を見て、よかったところを伝え合おう ワンチャレタイムでは、最後の演技としてグループの中で見せ合い、学習の成果を称え合おう 5　学習成果発表会 ・学習成果発表会の流れ（ペア同士の発表）と発表の仕方、一言メッセージの記入や扱いについて理解する。 ・移動の仕方を理解する。 ①自分のグループ以外の場所にペアで移動して四人組を作り、互いのペアの発表を聞き合う。 ②発表する際は作成した紹介シナリオを用いて、自分のペアの動画について発表を行う。 ③最後は発表者が単元を通して頑張ったことを伝えて、発表を終える。 ④発表に対して一言メッセージを記入し、発表者に渡す。 ⑤互いの発表が終わった後、他のグループの所に移動する。 6　ワンチャレタイム ・学習成果を踏まえ、最後の演技として、グループの中で見合い、互いに演技を称え合う。	○発表方法や一言メッセージの書き方、移動の仕方等、スライドを用いて説明する。 ○発表後は、速やかに他のグループの所に移動することを確認する。 ○発表については、堂々と発表するように伝える。
まとめ13分	7　場の片づけ・整理運動 8　本時のまとめ ・グループで振り返りをする。 ・学習カードに振り返りを記入する。 ・単元の総括 9　挨拶・体調確認	○片付けの際、安全面に留意することを確認する。 ○巡回し、学習カードに記入することを伝える。 ○単元を振り返って、クラス全体の良かった点や、今後の保健体育の学習を取り組む際に継続して意識してほしいことを共有する。 ○けが等がないか確認する。

【授業としての振り返り】

学習のまとめとして、学習成果発表会をポスターセッションの形態で行った。動画を用いた発表会にしたことで、今までの取組の中から一番よい演技を選択して発表会の映像を作成することができた。また、映像を見る前に、ペアの生徒が実施者の課題解決に向けて重点的に取り組んだことを紹介することで、視聴する側も意識して演技を視聴することができた。

【研究の視点からの振り返り】

仲間との関わりを深めることを意識して単元を実施してきたが、学習成果発表会では、称賛の声を掛ける場面や拍手をする場面が多く見られた。また、発表を見た生徒が、発表者に一言メッセージカードを書いて提出するようにしたことで、笑顔が溢れ、クラス全体で温かい雰囲気の中で実施することができた。

６　検証授業の結果と考察

検証結果で得られたデータを基に、設定した検証の視点（第３章２（３）pp. 10～11）に沿って仮説を検証した。

表５は、９時間の単元における生徒の出席及び欠席の人数である。今後の検証においては、出席者の回答のみを検証したことから、全体数が表の通り変化する。

文中の生徒の記述については、誤字・脱字を除き、生徒が記述したままの表現で記載した。また、図表のうち、割合表記（%）のものは小数第２位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

表５　単元における生徒の出席及び欠席の人数

日時	９/20	９/22	９/27	９/29	10/３	10/４	10/６	10/10	10/11
時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9
出席者	32	29	29	29	29	31	31	30	32
欠席者	0	3	3	3	3	1	1	2	0
実態把握アンケート（７月14日）31名			事前アンケート（９月５日・20日）32名				事後アンケート（10月17日）32名		

（１）生徒は授業をどのように捉えたか

ア　生徒は毎時間の授業をどのように捉えたか

高橋らの作成した生徒による授業評価である「形成的授業評価法（p. ８参照）」（高橋他　2003）を用いて、毎時間の授業の最後に生徒自身が振り返りを行うようにし、その結果を分析した。

「形成的授業評価法」は、成果、意欲・関心、学び方、協力の４次元９項目からなり、項目や次元ごとに、はい（３点）、どちらでもない（２点）、いいえ（１点）として平均点を算出して活用する。

表６は、毎時間の各項目と総合評価の平均値を形成的授業評価診断基準（p. ８表３参照）に照らし合わせた結果を示したものである。

また、図15は、次元ごとと総合評価の平均値の推移を示したものである。総合評価の診断基準では、評定５（平均値2. 77以上）を「特に優れた授業」、評定４（平均値2. 58以上）を「よい授業」と捉えることができるとされている。

表６を見ると、５時間目以降は、協力の評定が５であった。これは、２時間目に「共生」、３時間目に「協力」について取り上げて授業を行い、それ以降はペアやグループの仲間との関わりを中心に授業を構成し、授業中の取組や学習カードの記述内容をフィードバックし続けたことで、協働的な学びを通して学習を行う意識が高まったからではないかと考える。

９時間を通して見ると、３時間目以降は全ての項目で「４」以上を示し、生徒は授業を概ね肯定的に捉えていたと考えられる。

表６　形成的授業評価の推移（４つの次元「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」及び「総合評価」の得点と５段階の評定）

次元		1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目
成果	得点	1.97	2.40	2.61	2.74	2.76	2.62	2.62	2.52	2.83
	評定	2	3	4	5	5	4	4	4	5
意欲・関心	得点	2.66	2.81	2.91	2.90	2.93	2.84	2.85	2.90	2.95
	評定	3	4	4	4	4	4	4	4	4
学び方	得点	2.58	2.83	2.73	2.81	2.88	2.82	2.79	2.88	2.93
	評定	3	4	4	5	5	5	4	5	5
協力	得点	2.58	2.76	2.88	2.84	2.95	2.92	2.90	2.91	2.93
	評定	4	4	5	4	5	5	5	5	5
総合評価	得点	2.45	2.70	2.78	2.82	2.88	2.80	2.79	2.80	2.91
	評定	3	4	5	5	5	5	5	5	5

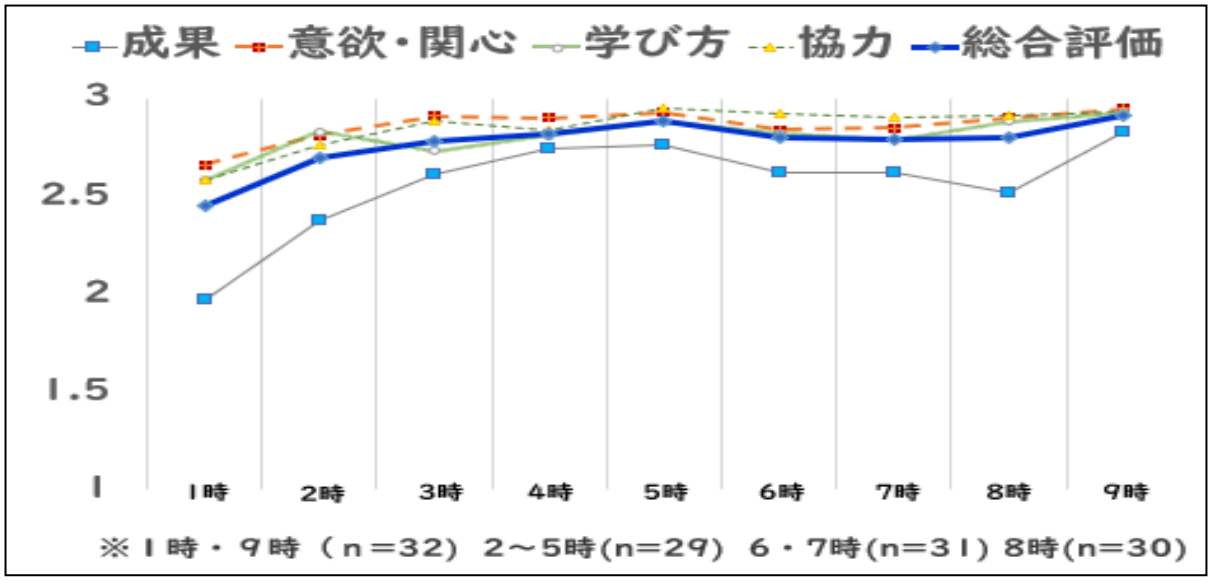


図15　形成的授業評価の結果

（２）「共生」「協力」の理解深化は図れたか

「共生」と「協力」の理解深化については、「共生の視点を持つことで、体育の授業ではどのような行動が出現されると思いますか」、「協力の視点を持つことで、体育の授業では具体的にどのような成果が生まれると思いますか」という事前・事後アンケートでの質問に対する回答に「共生」や「協力」の意味や意義の主旨を踏まえた記述があるかを検証することとした。事前・事後アンケートの生徒の記述内容を「表１　『共生』『協力』の理解を目指す内容」(p. ３参照）と照らし合わせて分析を行った。

ア　「共生」の理解深化は図れたか

「共生」の理解深化については、図16に示す通り、事前アンケートでは、「共生」の意味や意義の主旨を踏まえて回答できている生徒は一人もいなかったが、事後アンケートでは、56%（18名）の生徒が、主旨を踏まえた記述が見られた。このことから、授業以前には、「共生」という言葉の意味や意義を考えたことがなかった生徒がほとんどであり、今回の授業により、「共生」とはどういうことか、そして「共生」により、体育の授業で出現する望ましい行動等を考えられるようになったものと考えられる。

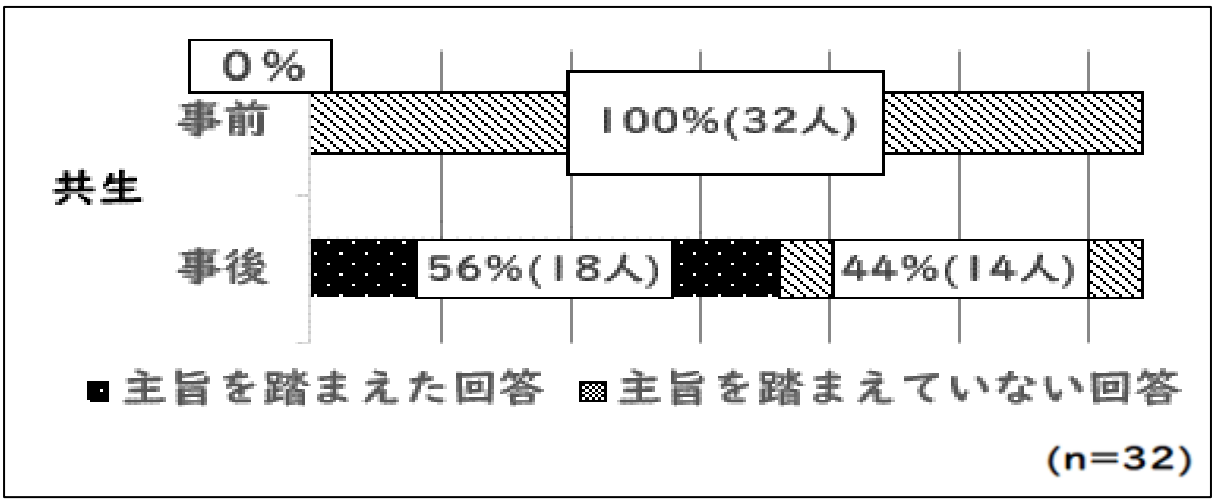


図16　「共生」の理解深化の状況

イ　「協力」の理解深化は図れたか

「協力」の理解深化については、図17に示す通り、事前アンケートでは、「協力」の意味や意義の主旨を踏まえた回答が75％（24名）であり、事後アンケートでは、84％（27名）であった。このことから、「協力」については、今回の授業以前から理解深化が図れていたと考えられる。

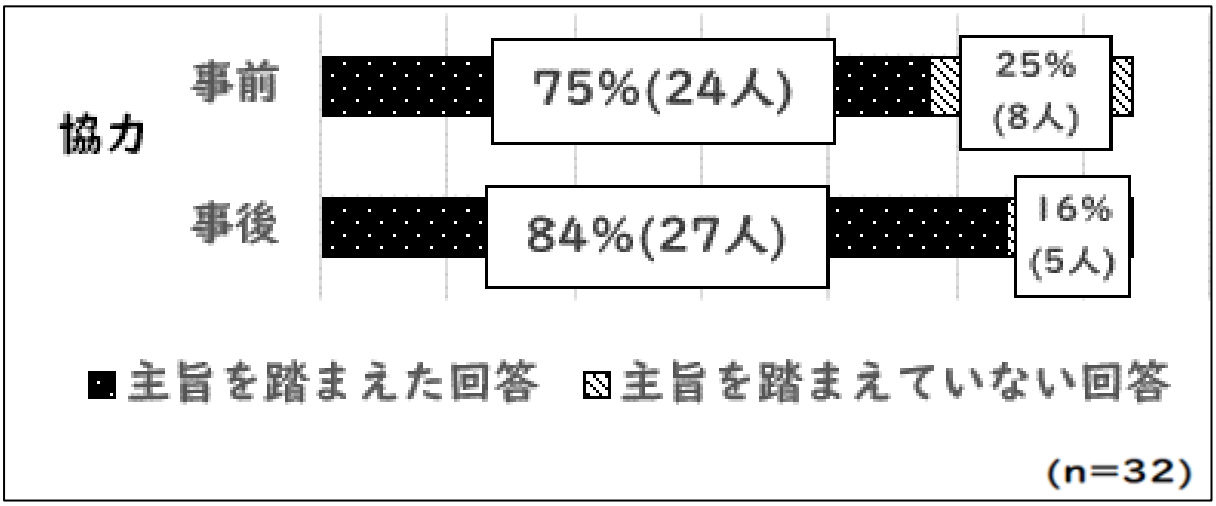


図17　「協力」の理解深化の状況

表７は、「共生」や「協力」についての事前アンケートと事後アンケートで変容があった生徒の回答の抜粋である。生徒Ａ・Ｂは事前アンケートでは空欄であったが、事後アンケートの回答からは、「共生」については、理解できていることが分かる。生徒Ｃ・Ｄは、事前アンケートから「協力」の意味や意義の主旨を踏まえた回答ができていたが、事後アンケートでは、より具体的な回答に変容していた。

表７　事前・事後アンケートの「共生」「協力」の理解深化に係る記述（抜粋）

	生徒	事前	事後
共生	A	記述無し	人と違う考えを持つことができ、体育がさらに楽しくなる
	B	記述無し	互いを認めて取り組める
協力	C	技が上手くできるようになる	困っているところを助け合おうと思い、技がみんな上手くできるようになる
	D	できないことができるようになる	アドバイスしたり、してもらったりして、みんな成長する

これらのことから、「共生」については、生徒はこれまでに知識として習得できておらず、理解が十分でなかったと考えられるが、本単元において学習したことで、半数以上の生徒の理解が促進されたと考えられる。

一方で、「協力」については、授業前からその意味や意義について理解している生徒が多かったが、理解していない生徒の状況は授業後も大きな変容がなく、理解深化という面では効果的な指導が必要であると考えられる。

以上のことから、「共生」「協力」の意味や意義についての理解は促されたが、理解深化が図れなかった生徒もいたことから、更なる指導の工夫が必要であると考えられる。

（３）観察シートと動画の活用はどうであったか

ア　観察シートと動画の活用度について

図18は、事後アンケートにおいて、「観察シート」「見本動画」「試技動画」のそれぞれについて「活用できましたか」という質問（４件法）に対する回答結果である。「よく活用できた」と「活用できた」を合わせた「活用できた群」は、「観察シート」が41％と59％を合わせて100％、「見本動画」が22％と41％を合わせて63％、「試技動画」が34％と44％を合わせて78％であった。

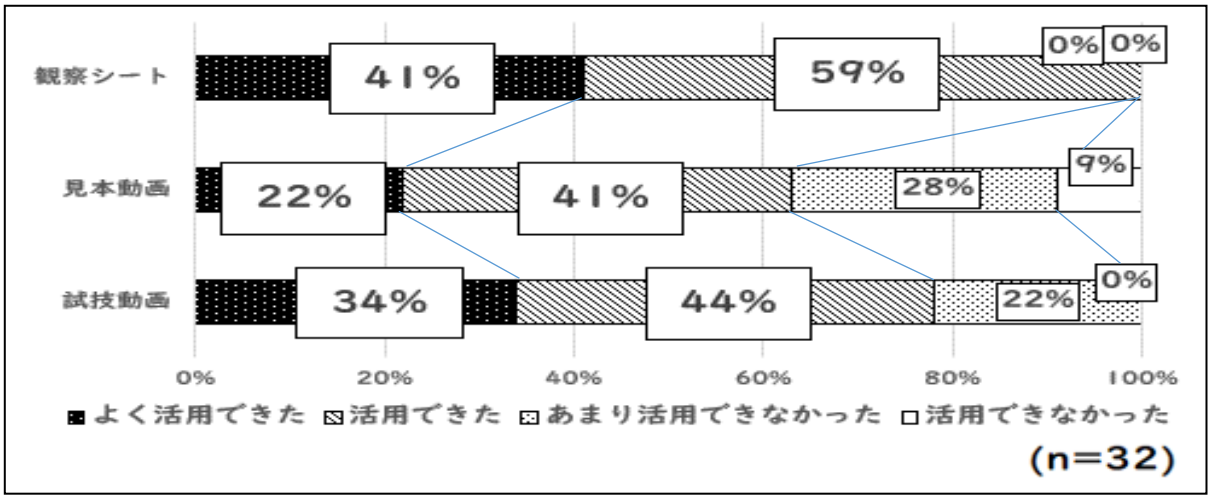


図18　観察シートと動画の活用度について

図19は、事後アンケートにおいて、「観察シート」「見本動画」「試技動画」のそれぞれについて、「成果の把握」「課題の把握」「技のポイントの理解」の３点において「役立ちましたか」という質問（４件法）に対する回答結果である。「非常に役立った」と「役立った」を合わせた「役立った群」は、いずれも75％以上であり、役立つと感じていた生徒は多いと考えられる。また、「役立った群」は、ほとんどが90％以上である中、

「見本動画」においては、「成果の把握」が31%と50%を合わせて81%、「課題の把握」が34%と41%を合わせて75%と、90%未満であった。

これは、図18の活用度のデータにおいて、「見本動画」は「観察シート」や「試技動画」に比べ、あまり活用されていないことが分かっており、そのことと関係があると考えられる。動画を視聴するのは一定の時間が必要となり、「見本動画」で役立つと考えられた「技のポイントの理解」は、「観察シート」で代用できると考え、視聴に一定の時間を要する「見本動画」の活用は、活用の優先順位が低かったと考えられる。そのため、授業以外の時間での視聴を促すなどの指導も必要であったと考えられる。

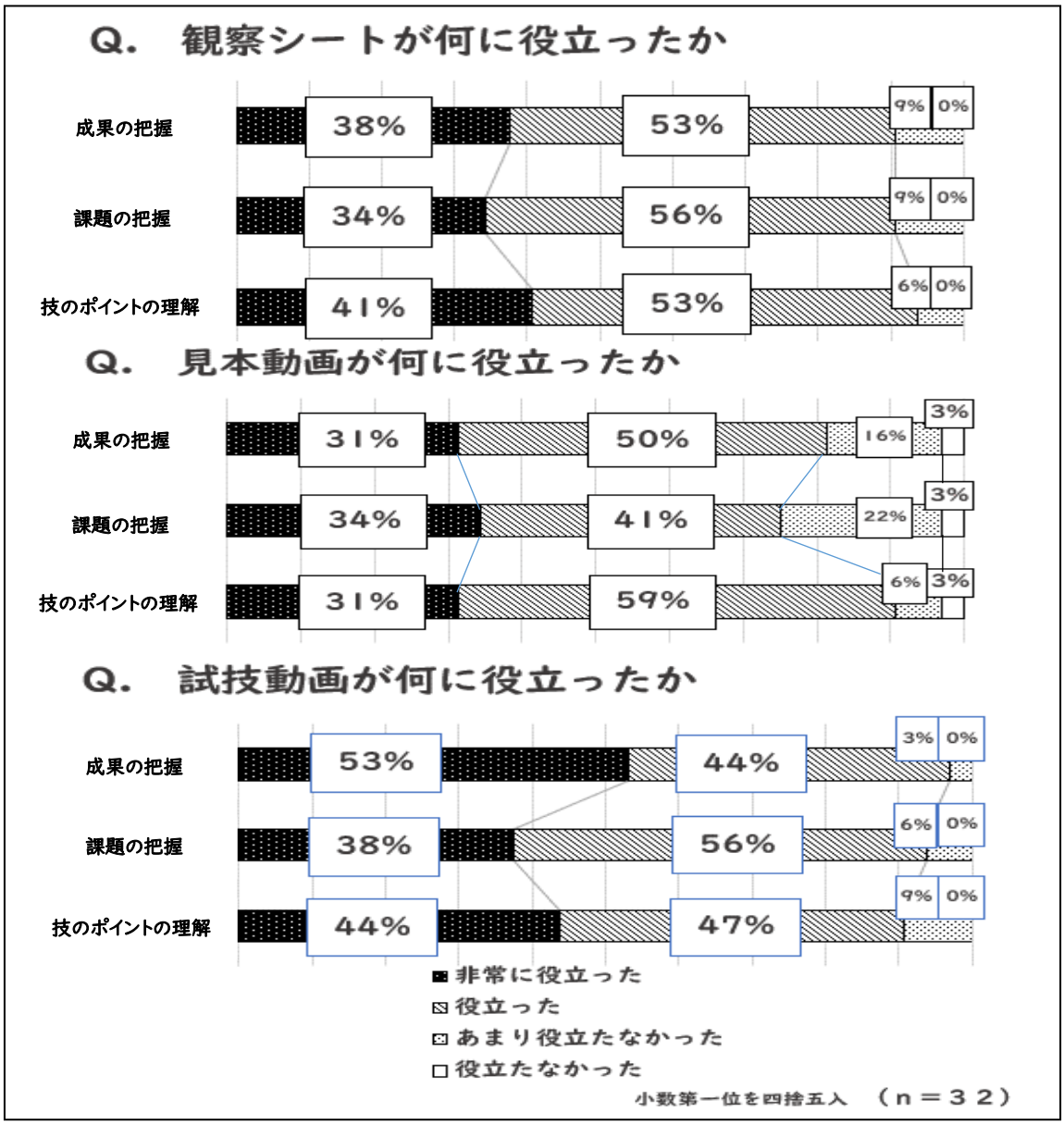


図19　観察シート、見本動画、試技動画の役立ち度

（４）協働的な学びが充実したか

ア　協働的な学びの充実について

協働的な学びが充実したかどうかを検証するにあたり、仲間と関わることはできたのか、またどのような助言等を行ったかを分析することとした。

図20は、事後アンケートの「ペアで関わることができましたか」「グループの仲間と関わることができましたか」という質問（４件法）に対する回答結果である。いずれも「よく関わることができた」と「関わることができた」を合わせた「関わることができた群」が100％であった。本単元では、グループでの活動よりも動画の撮影や観察シートを活用するなど、ペアでの活動が多かったことから、グループよりもペアの仲間と「よく関わることができた」と回答した生徒が多くなったと考えられる。

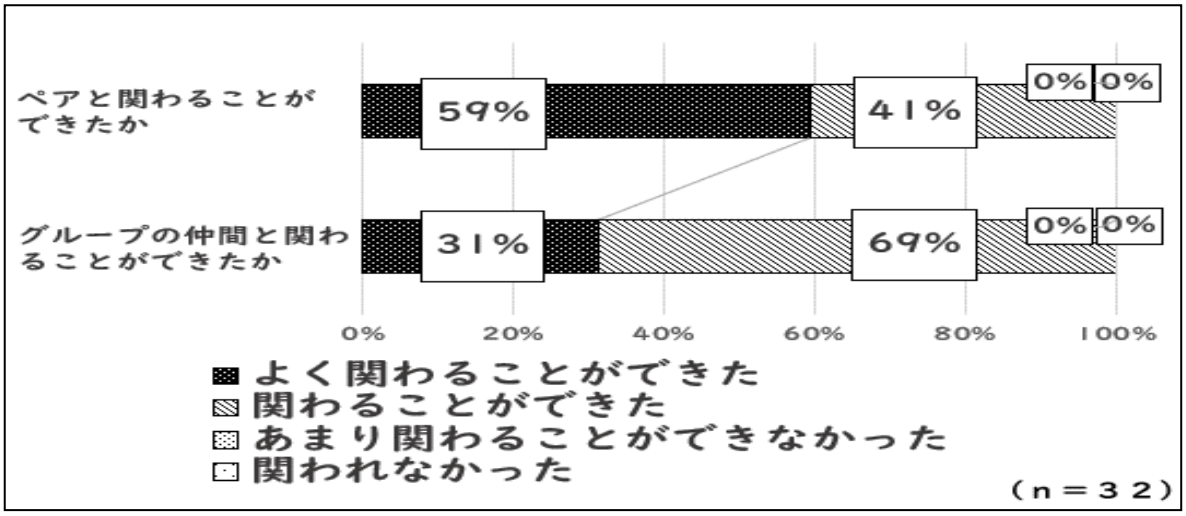


図20　ペア・グループの仲間と関わることができたか

図21は、ペア同士での活動時間を十分に設定した（約25分）３、４、６、７時間目のペアの仲間に助言をした生徒の割合である。３時間目には73％だったが、回を重ねた７時間目には14ポイント増加して87％になっており、より多くの生徒がペアの仲間に助言ができるようになったことが分かる。

なお、６時間目に助言をした生徒が減少したのは、本時がほん転技と平均立ち技の完成を目指す授業であり、各自が技の習得に没入しており、仲間に助言する時間が少なくなったためではないかと考える。

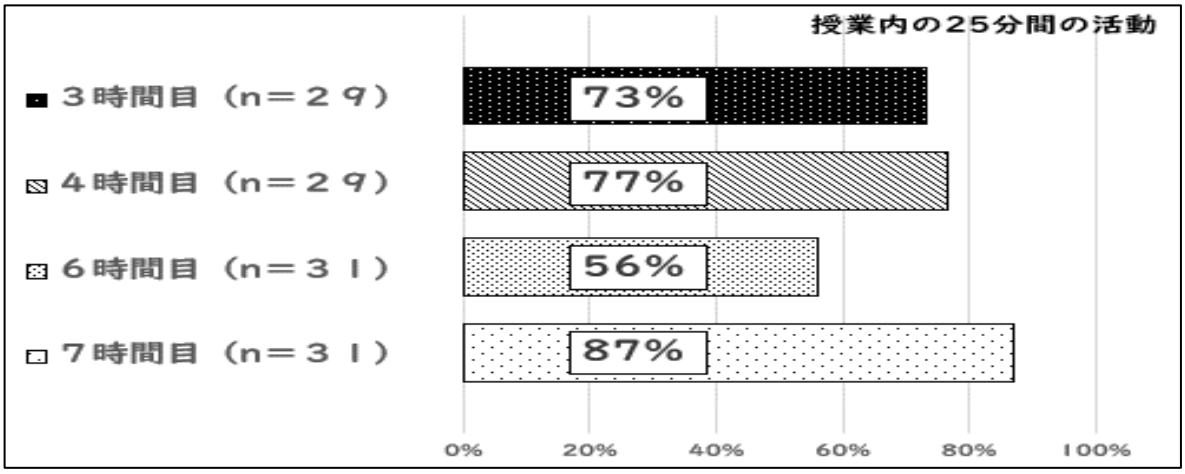


図21　ペアに行った助言の割合

表８は、生徒が７時間目の学習カードに記載した主な助言内容である。生徒ＥとＦの助言内容は、ペアの課題に合致した内容となっており、ペアの課題を適切に把握した助言となっていた。生徒Ｇは、観察シートに示されているポイントを踏まえた助言となっていた。生徒ＨとＩは、本時の授業で学習した「技の雄大さ」について助言を行っていた。

表８　７時間目における主な助言内容

生徒	助言
E	倒立時に足を揃えると、きれいに見える
F	伸膝後転で、もう少し足を伸ばす
G	開脚前転で、もう少し大きく開く
H	動きやポーズが大きくなるとよい
I	最後の着地で止まるときれい

本研究では、助言内容の質的変容の分析やペアごと、グループごとの分析はできなかったが、単元後半の７時間目には、仲間のための具体的な助言が行われていた。

以上のことから、ペアやグループによって状況に違いはあるが、協働的な学びが充実したペアやグループがあった可能性が示唆された。

（５）「分かる」「できる」を実感できたか

ア　「分かる」を実感できたか

「分かる」を実感できたかについては、事前・事後アンケートで、「次の表はマット運動で行う技の一覧です。行い方のポイントについて１～５の中から選んで○をつけてください」という設問を設けて検証した。具体的には、『解説』に示されているマット運動の主な技の例示に記載されている22の技のポイントについて、あてはまるもの（５　よく分かる、４　少し分かる、３　あまり分からない、２　分からない、１　やったことがない）を選んで回答した。なお、検証にあたっては、本単元で生徒が最終的に取り組んだ技（一人につき三つの技）についての回答のみを対象とし、集計した（ｎは、対象とした技の総数である）。

図22は、事前・事後アンケートにおける、技のポイントの自己評価による理解度を示した図である。「よく分かる」と「少し分かる」を合わせた「分かる群」は、事前アンケートの「よく分かる」39%、「少し分かる」23%を合わせた62%から、事後アンケートの「よく分かる」67%、「少し分かる」23%を合わせた90%へと28ポイント増加する結果となった。このことから、生徒全体としては学習した技のポイントの理解が促進されたことから、「分かる」を実感できたと考えられる。

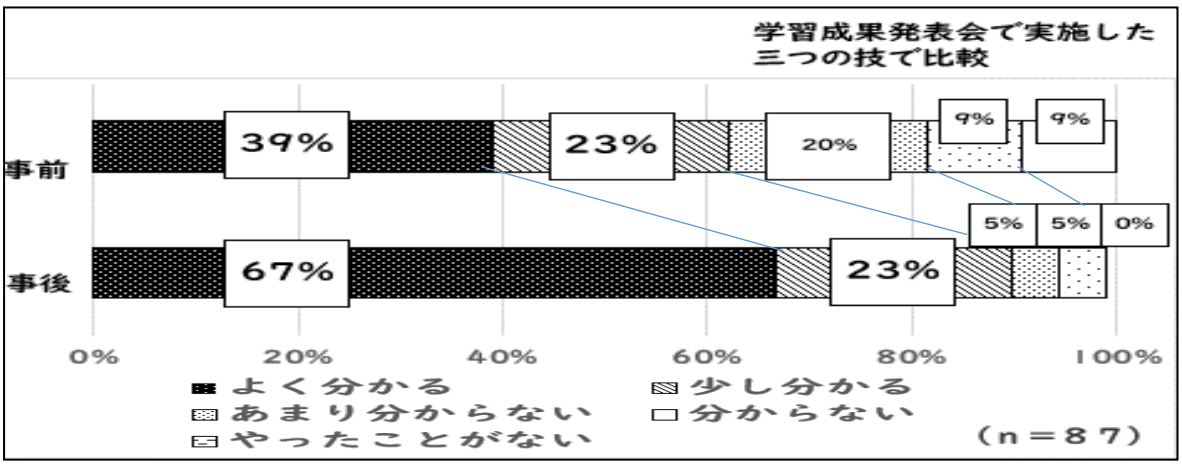


図22　技が「分かる」を実感したか

イ　「できる」を実感できか

技が「できる」を実感できたかについては、技のポイントが分かったかと同様に、事前・事後アンケートで、「次の表はマット運動で行う技の一覧です。各技の習得状況について１～５の中から選んで〇をつけてください」という設問を設けて検証した。具体的には、『解説』に示されているマット運動の主な技の例示に記載されている22の技のポイントについて、あてはまるもの（５　何回やってもできる、４　できる３　補助等があればできる、２　できたことがない、１　やったことがない）を選んで回答した。そして対象は、前述の「『分かる』を実感できたか」の検証と同様とした。

図23は、事前アンケートと事後アンケートの「技ができるか」についての自己評価の結果を示した図である。「何回やってもできる」「できる」「補助等があればできる」を合わせた「できる群」は、事前アンケートの「何回やってもできる」47%、「できる」22%、「補助等があればできる」10%を合わせた79%であったが、事後アンケートの「何回やってもできる」79%、「できる」20%を合わせた99%となり、20ポイント増加する結果となった。このことから、全体としては学習した技ができるようになったことから、「できる」を実感できたと考えられる。

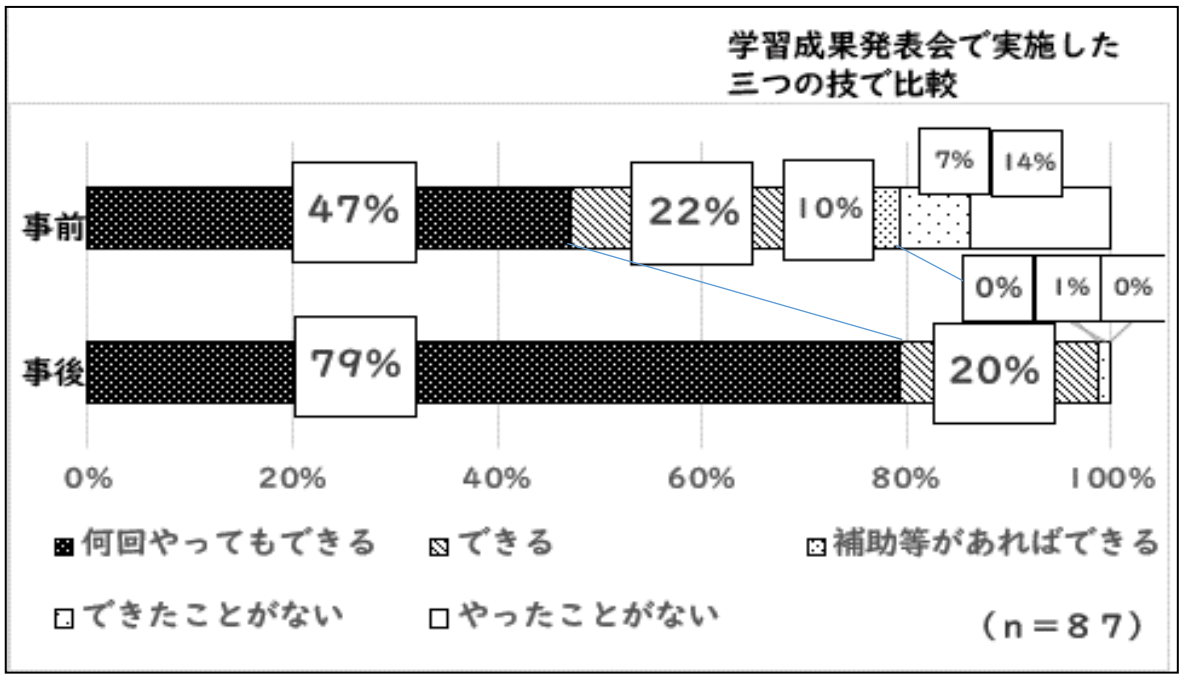


図23　技が「できる」を実感したか

なお、実際に技能が向上しているかを検証するため、単元のはじめに撮影した動画と、最後に撮影した動画（自分で選択した三つの技を撮影したもの）の比較分析を指導主事２名と行った。

比較分析の方法は、技の出来映えを点数化した。図24のように、自身で選択した三つの技について、各技の観察シートに示されているポイントを満たしていれば１点加点することとした。さらに、「技のつながり」が認められれば＋１点とし、「技の雄大さ」が認められれば＋１点の合計点で分析した。

分析の結果、単元のはじめと最後に撮影した動画をともに提出した27人のうち、25人の技が最低一つは出来映えが向上していることが確認できた。このことから、自己評価は信頼できるものであると考えられる。

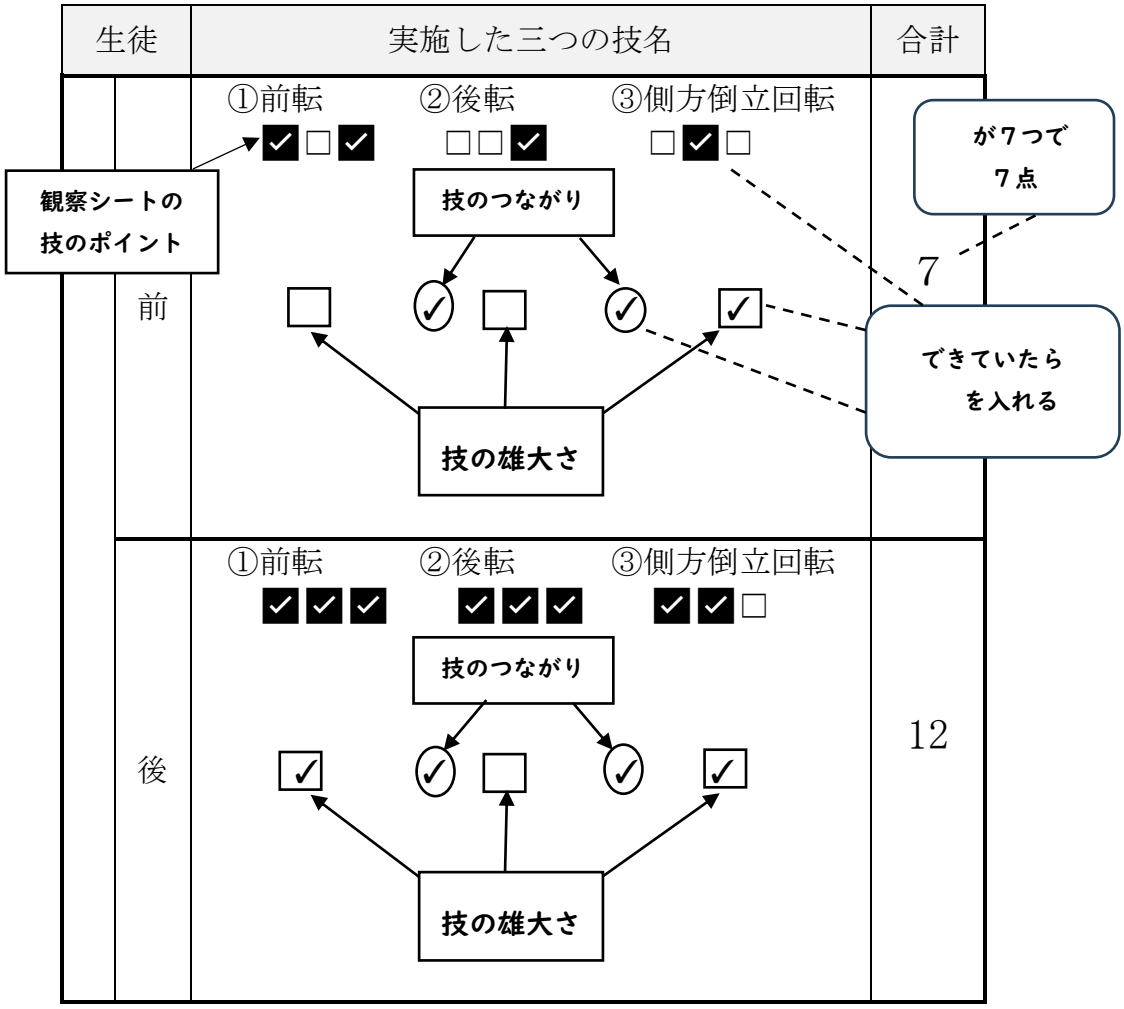

生徒
実施した三つの技名
合計
①前転
②後転
③側方倒立回転
観察シートの
技のポイント
技のつながり
技の雄大さ
前
7
が７つで
７点
できていたら
を入れる
後
12

図24　技能確認の例

ウ　各技の「分かる」と「できる」の変容について

下図25は接転技群、図26はほん転技群、図27は平均立ち技群の、「分かる」「できる」の事前・事後アンケートの変容である。

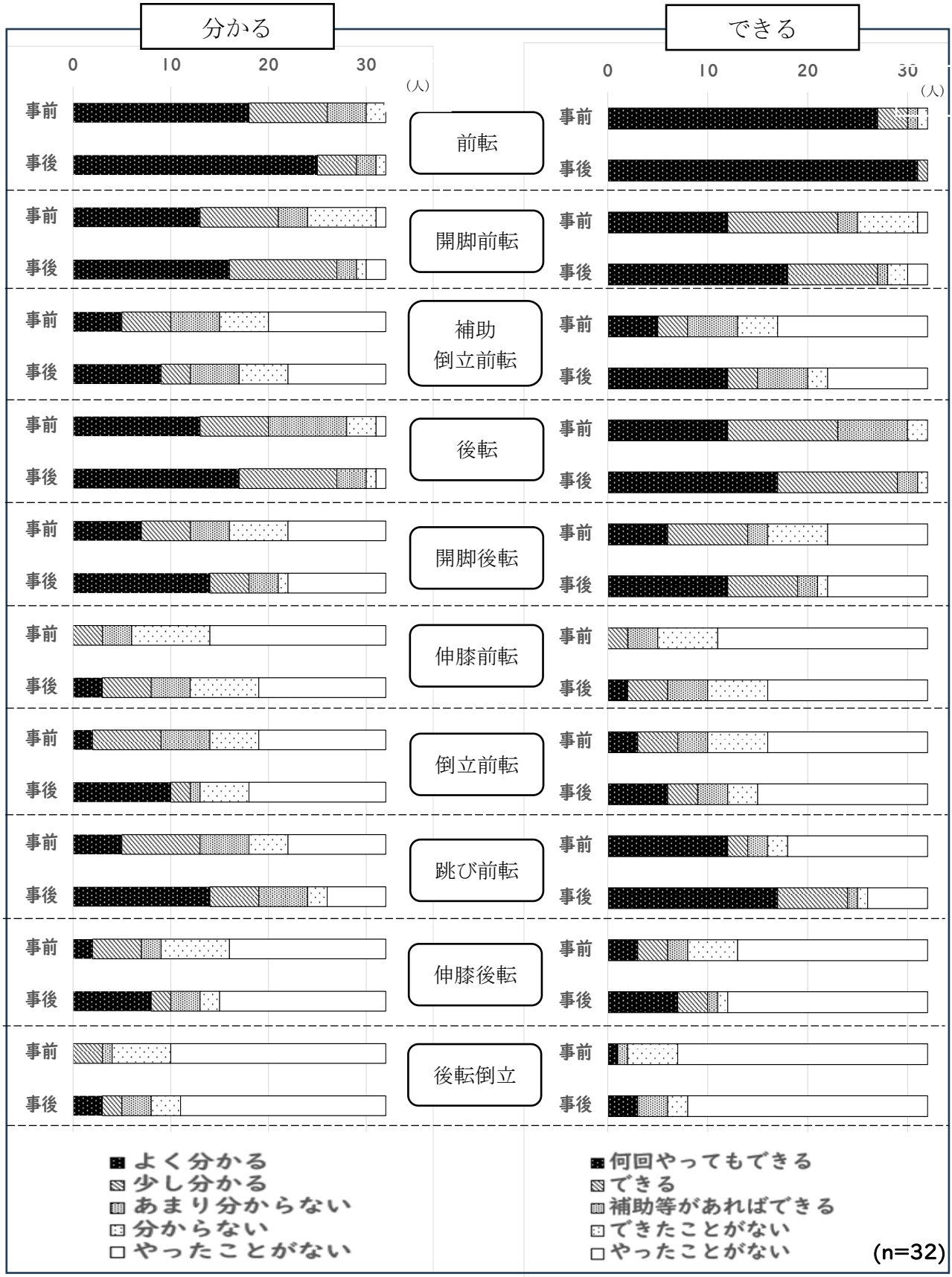


図25　接転技群の「分かる」「できる」の変容

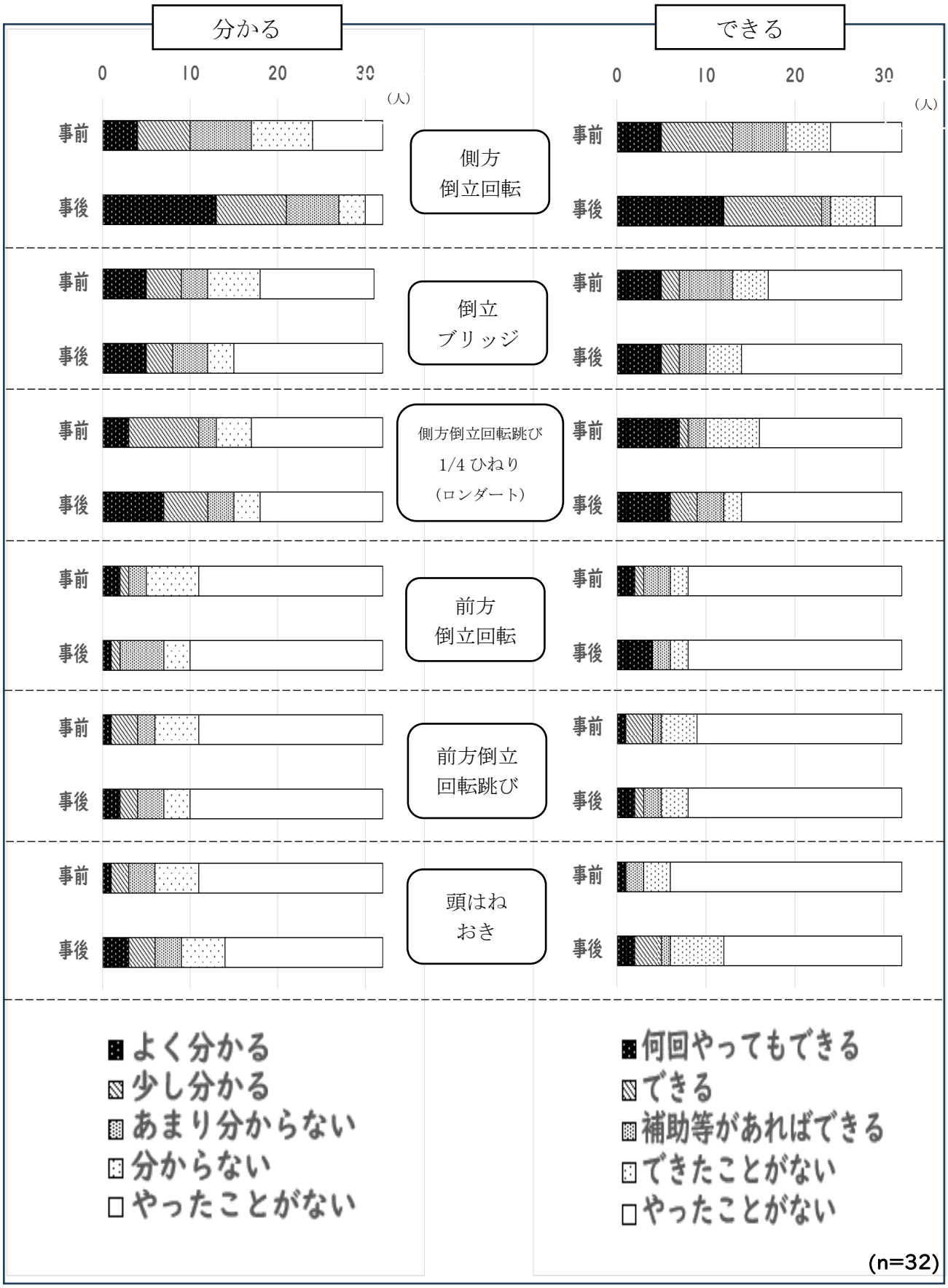


図26　ほん転技群の「分かる」「できる」の変容

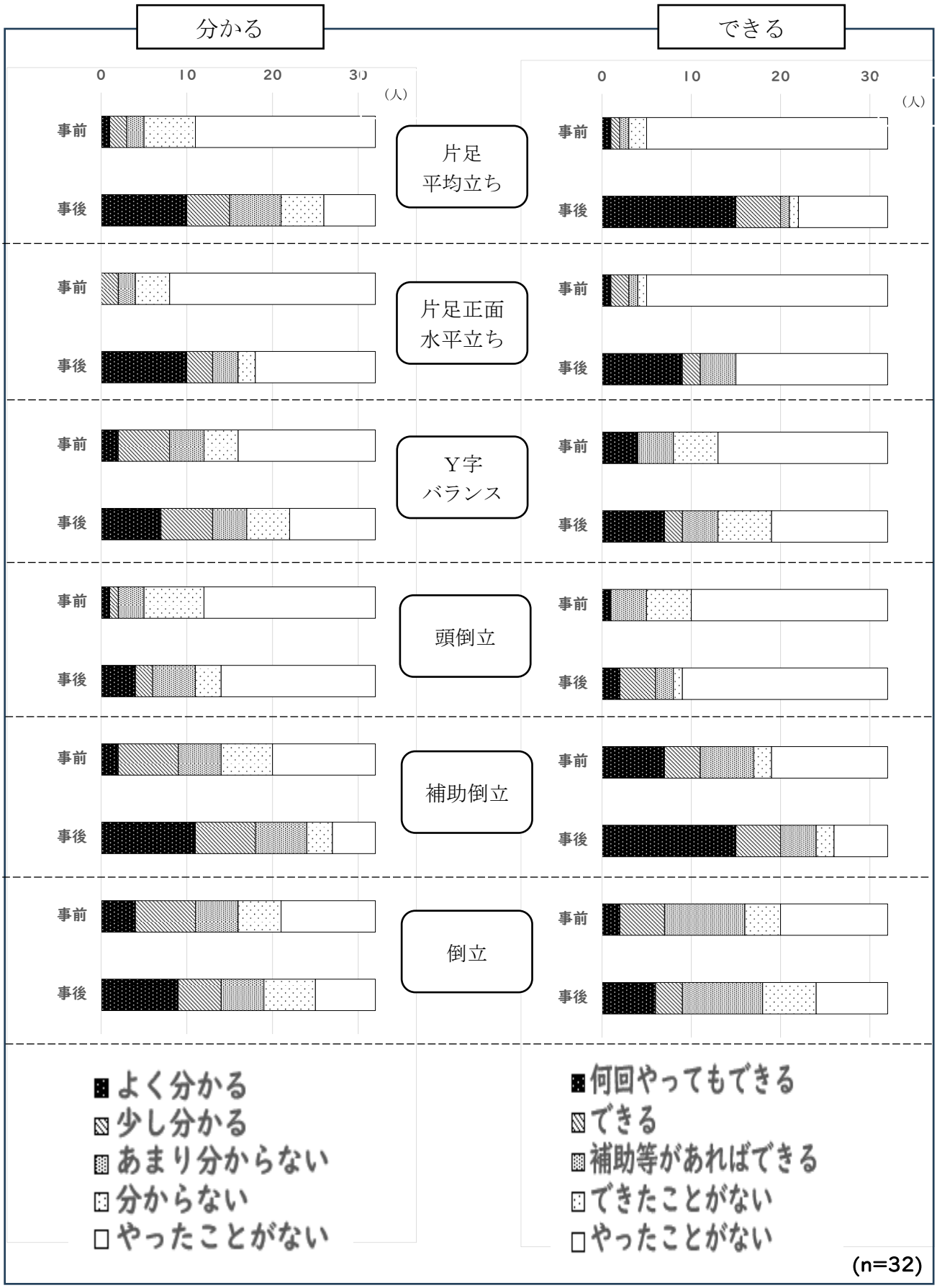


図27　平均立ち技群の「分かる」「できる」の変容

今回のマット運動の単元では、生徒が取り組みたい技を選択して、課題解決に取り組むようにしたが、図25～27を見ると、単元の中で生徒が様々な技に取り組んでいる様子が分かる。自分が得意な技だけでなく、やったことがない技にも挑戦し、「分かる」「できる」を実感していることが考えられる。

また、技群ごとにデータを見ていくと、接転技群は小学校までに学習している技が多く、事前アンケートでも「やったことがない」と回答している割合は比較的少なかった。すでに学習している技に取り組みながら、単元を通して、より「分かる」「できる」を実感していることが分かる。

ほん転技群は、難易度が高くなるにつれ、「やったことがない」と回答している技が増えている。このことから生徒は、技の系統性を意識しながら取り組んでいる様子が分かる。事前アンケートと事後アンケートを比較して、「やったことがない」と回答している生徒の割合が増加している技が多いのは、事前アンケートでは技名だけを見てやったことがあると思っていたが、単元を通して観察シートや見本動画を見て改めて技を確認したところ、自分が思っていた技とは違い、「やったことがない」の回答が増加したと考えられる。

平均立ち技群は、これまで「やったことがない」技が比較的多く、多くの生徒にとって初めて取り組んだ技が多かった様子が分かる。その中で、「分かる」「できる」を実感しながら学習に取り組んでいたことが考えられる。

多くの技で、「分かる」「できる」と回答した生徒の割合が増加したことから、単元を通して生徒は「分かる」「できる」を実感していたことが分かった。また、各技群や技の難易度に関わらず、「分かる」の割合が増えると、「できる」の割合が増えるといった相関があることも分かった。これらのことは、「やったことがない」と回答している生徒が多い技においても、同様の結果となった。これらのことから、「分かる」と「できる」には強い関連性があることが示唆され、どんな技でも、まずは挑戦してみることで、技のポイントが「分かり」、「できる」につながるのではないかと考えられる。

第４章　研究のまとめ

１　研究の成果と課題

（１）研究の成果

図28は、本研究の仮説を基に、これまでの検証結果から、それぞれの関係性を整理したものである。

「共生」「協力」の理解深化を図ることと、「観察シート」「見本動画」「試技動画」を活用することで、協働的な学びが充実し、「分かる」と「できる」の実感につながる関係性を示している。

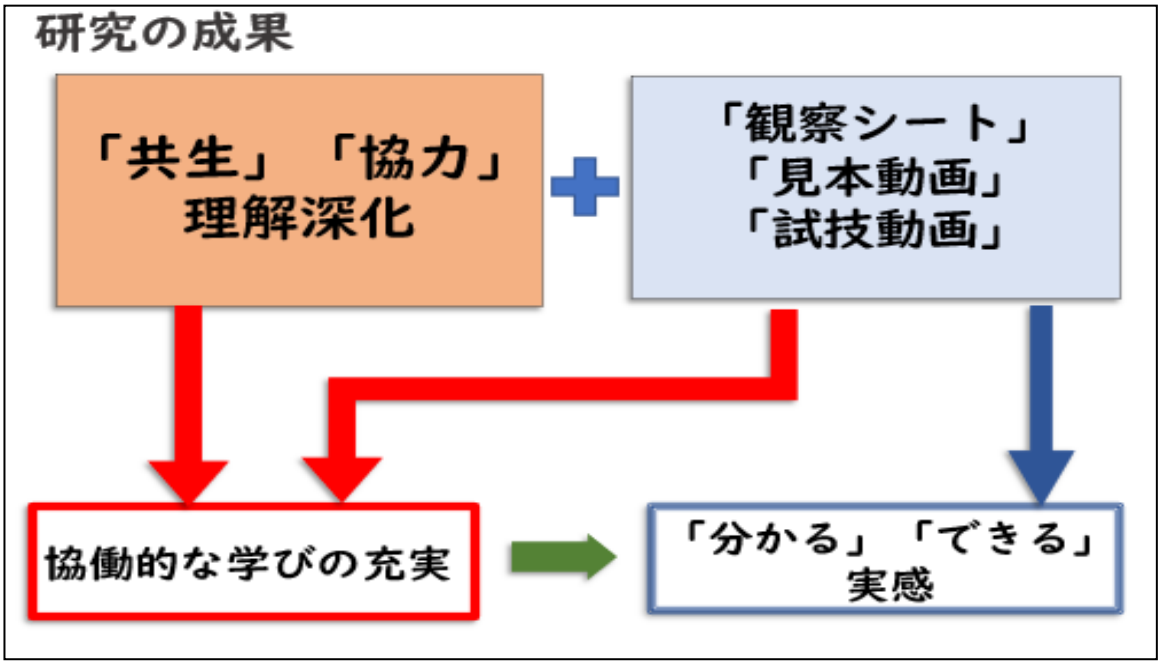


図28　本研究における手立てと結果の関係図

「共生」「協力」の理解深化については、フェアプレーニュースを用いて指導時間を設定し、「共生」「協力」の意味にとどまらず、意義まで理解できるよう指導した。その後、授業内において「共生」「協力」に係る生徒の言動に、適宜、肯定的な言葉かけをしたり、生徒の学習カードの「共生」「協力」についての記述内容を全体の場でフィードバックをしたりするなど、意図的・計画的に指導を行った。

その結果、「共生」については、単元のはじめには、「共生」を学ぶことの意義まで理解できている生徒はほとんどいなかったが、単元の最後には、半数以上の生徒が「共生」を学ぶことの主旨を踏まえて回答できるようになった。

また、「協力」については、単元の開始時から、「協力」を学ぶことの主旨を踏まえて回答できる生徒が多く、既に多くの生徒が「協力」の理解深化ができていたものと思われる。そのため、単元の終了時の数値にも大きな変化は見られなかったが、主旨を踏まえた回答は若干増加していた。

これらのことから、今回のマット運動の授業を通して、「共生」「協力」について意図的・計画的に指導したことによって、全員とは言えないが「共生」「協力」の理解深化が促されたと考える。

「共生」「協力」について理解したことが単元を通して態度として表出している場面を多く見ることができた。例えば、技能の習得に向けて取り組む時間は常にペアで行動するようにしたことで、ペアの生徒の挑戦を互いに認め合ったり、失敗しても励まし合ったりする姿があった。これは「共生」の態度が涵養されている姿であると捉えることができる。また、ペアやグループでの学習活動の中で、観察シートを使って成果と課題を伝えあっている場面

や、互いの試技動画を撮影し、さらなる技能向上に向けて話し合っている場面など、ペアやグループで「協力」しながら学習に取り組んでいる姿も見られた。このように、「共生」「協力」について理解したことが協働的な学びの充実につながり、多くの生徒が「分かる」と「できる」をより実感できたと考える。

本単元の最後に実施した学習成果発表会は、筆者のこれまでの課題であった、演技を見せる際に生徒が持つ羞恥心を払拭して、仲間と発表を行う姿が見られた。

ペアの仲間の紹介シナリオを発表する場面では、どの生徒もペアの生徒の単元を通しての挑戦を認めるような発表をしており、「共生」の指導事項である、一人ひとりの違い（仲間の体力や技能の程度等）に応じた課題や挑戦を認めようとする姿を見ることができた（図29）。

発表に用いた動画には、仲間の補助を活用して演技に取り組んでいる生徒もいた。まさに「協力」の指導事項である、仲間の学習を援助しようとする姿である。補助をしている生徒は、補助をすることで技のポイントが「分かる」ことが促進され、補助を活用している生徒は、補助を受けながら「できる」を実感している様子が分かる（図30）。

また、発表を見た後に一言メッセージを記入した際には、ペアの生徒以外の仲間の挑戦についても認めるような記述をしており、一言メッセージを受け取った生徒は、自分の挑戦を認めてもらい、嬉しそうにしていた。

単元の終末にこのような「共生」「協力」の態度が涵養された姿を見ることができたことも、今回の研究の成果の一つであったと考える。

図29　学習成果発表会の様子

図30　仲間の補助を活用して演技に取り組む姿

（２）研究の課題

「共生」「協力」の理解深化については、まだ理解深化が図れなかった生徒もいたことから、課題が残る結果となった。今回は、フェアプレーニュースを活用したが、もっと中学生が興味を持てるような教材や身近な題材など、心に響くリアリティのある教材開発をすることや、継続的な指導が必要であると考える。

また、今回使用した観察シートの技のポイントについても、より生徒の実態に沿ったポイントを示せるよう、改良が必要であると考える。

見本動画の活用については、音声により観察シートとは違う技のポイントが説明されていたため、観察シートの技おポイントと見本動画の技のポイントが一致するような整理を一層進め、より分かりやすい技のポイントを示すことも今後の課題と捉えている。

２　今後の展望

今回は、器械運動「マット運動」における授業実践であったが、今後は、他の領域及び内容においても、仲間と関わりながら協働的に学び、「分かる」と「できる」を結び付けて授業実

践をしていき、当該領域及び内容の特性や魅力をより感じることができる授業づくりを目指したい。

３　おわりに

本研究を行うにあたり、校務多忙の中、検証授業の準備から実施まで多くの協力をいただいた、小田原市立城山中学校の市川義裕校長、松澤文恵教頭、第１学年所属の先生方、保健体育科の先生方をはじめ、先生方に心より感謝する。また、専門的な見地から様々な指導・助言をいただいた日本体育大学教授の岡出美則氏、神奈川県教育委員会教育局指導部保健体育課、県西教育事務所、小田原市教育委員会の指導主事の方々に感謝する。さらに、本研究の趣旨を理解し、本研究への協力を承諾していただいた１年３組の保護者の皆様にも感謝申し上げる。

そして、何より、９時間の授業に一生懸命に取り組む姿を見せた生徒の皆さんに敬意を表し、結びとする。

【担当指導員】

千葉　周平　指導主事　　加賀谷　光　指導担当主事　　西塚　祐一　教育指導員

［引用・参考文献］

文部科学省 2018a 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編』 東山書房
文部科学省 2018b 『中学校学習指導要領(平成29年告示)』 東山書房
文部科学省 2018c 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説体育編』 東洋館出版
文部科学省 2019 『教育の情報化に関する手引き』
中央教育審議会 2021 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」
岡出美則 1994 「体育の授業を創る－創造的な体育教材研究のために－」高橋健夫編著,大修館書店 p. 131
高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝夫 2003 「体育授業を形成的に評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版 pp. 12-15
松丸渉 2013 「見合いの視点を明確にし、活発に伝えあい高め合える授業づくり」 『初等教育資料』 東洋館出版社 p. 36
宮﨑友子 2014 「参加意欲を高めて技が達成できるマット運動の授業－「安心感」「仲間意識」「自己効力感」を持ち、段階的に学習に取り組める教材・教具の開発、工夫を通して－」（平成26年度体育センター長期研修研究報告）p. 6